

平成29年度 [2017年度]  
橿原市文化財調査年報

奈良県橿原市教育委員会  
2019年 2月

## 序

榿原市には特別史跡 藤原宮跡をはじめとする多くの遺跡や重要伝統的建造物群保存地区に選定されている今井町など、数多くの文化財が所在します。世界に誇るべき長い歴史と文化が育まれた場所と言えます。

この年報では、平成29年度に行いました遺跡の発掘調査、文化財保護事業、普及啓発事業等の概要を報告いたします。

本書が、市民をはじめ多くの方々に、榿原市の文化財に触れていただく良い機会となれば幸いです。

なお、事業を実施するにあたりまして、ご協力いただきました方々ならびにご指導賜りました関係諸機関及び諸氏には心より感謝申し上げます。

平成31（2019）年2月

榿原市教育委員会

教育長 吉本重男

## 例 言

1. 本書は、平成 29 年度に奈良県橿原市教育委員会事務局文化財課が実施した、下記事業の概要をまとめたものである。
  - I. 埋蔵文化財発掘調査事業
  - II. 出土遺物保存処理事業
  - III. 文化財諸申請処理業務
  - IV. 普及啓発事業
  - V. 史跡整備事業
  - VI. 指定文化財維持管理事業
  - VII. だんじり保存事業
2. 各事業の調整事務は、竹田正則、濱口和弘、平岩欣太、田原明世、泉岡康子、東村頼人が主に行い、他の課員が補佐した。また、I. 埋蔵文化財発掘調査事業、II. 出土遺物保存処理事業については、その担当者を後記文中に記した。
3. I. 埋蔵文化財発掘調査事業（ページ 1 の「平成 29 年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表」）のうち、⑤の試掘・確認調査は、平成 29 年度市内遺跡発掘調査等事業（平成 29 年度国庫補助事業）として実施した。また、II. 出土遺物保存処理事業、V. 史跡整備事業も同補助事業として実施した。
4. I. 埋蔵文化財発掘調査事業にあたっては、株式会社ジェイテクト 代表取締役 安形哲夫氏、山口万起代氏から多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。
5. 事業実施にあたり、次の機関及び諸氏からご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所都城発掘調査部、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、大阪市立東洋陶磁美術館 小林仁氏・出川哲朗氏、奈良市教育委員会 埋蔵文化財調査センター 三好美穂氏（五十音順）

また、橿教委 2017-2 次藤原京右京五条六・七坊調査出土の三彩片の科学分析については、橿原考古学研究所の奥山誠義氏、河崎衣美氏、小倉頌子氏にご協力いただいた。
6. I. 埋蔵文化財発掘調査事業の挿図における座標値は世界測地系座標である。
7. 本書の編集は、課員の協力のもと杉山真由美が行った。

## 目 次

序

例言・目次

I. 埋蔵文化財発掘調査事業	1
平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	1
平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査地位置図	1
埋蔵文化財発掘調査概要報告	2
十市町遺跡有無確認試掘調査（橿教委 2016 - 9 次・2017 - 1 次）	2
藤原京右京五条六・七坊（橿教委 2017 - 2 次）	12
藤原京右京五条八坊、慈明寺遺跡（橿教委 2017 - 3 次）	22
藤原京左京北一条三・四坊（橿教委 2017 - 4 次）	30
藤原京右京十一条三坊	34
II. 出土遺物保存処理事業	35
III. 文化財諸申請処理業務	35
IV. 普及啓発事業	36
V. 史跡整備事業	36
VI. 指定文化財維持管理事業	36
VII. だんじり保存事業	37

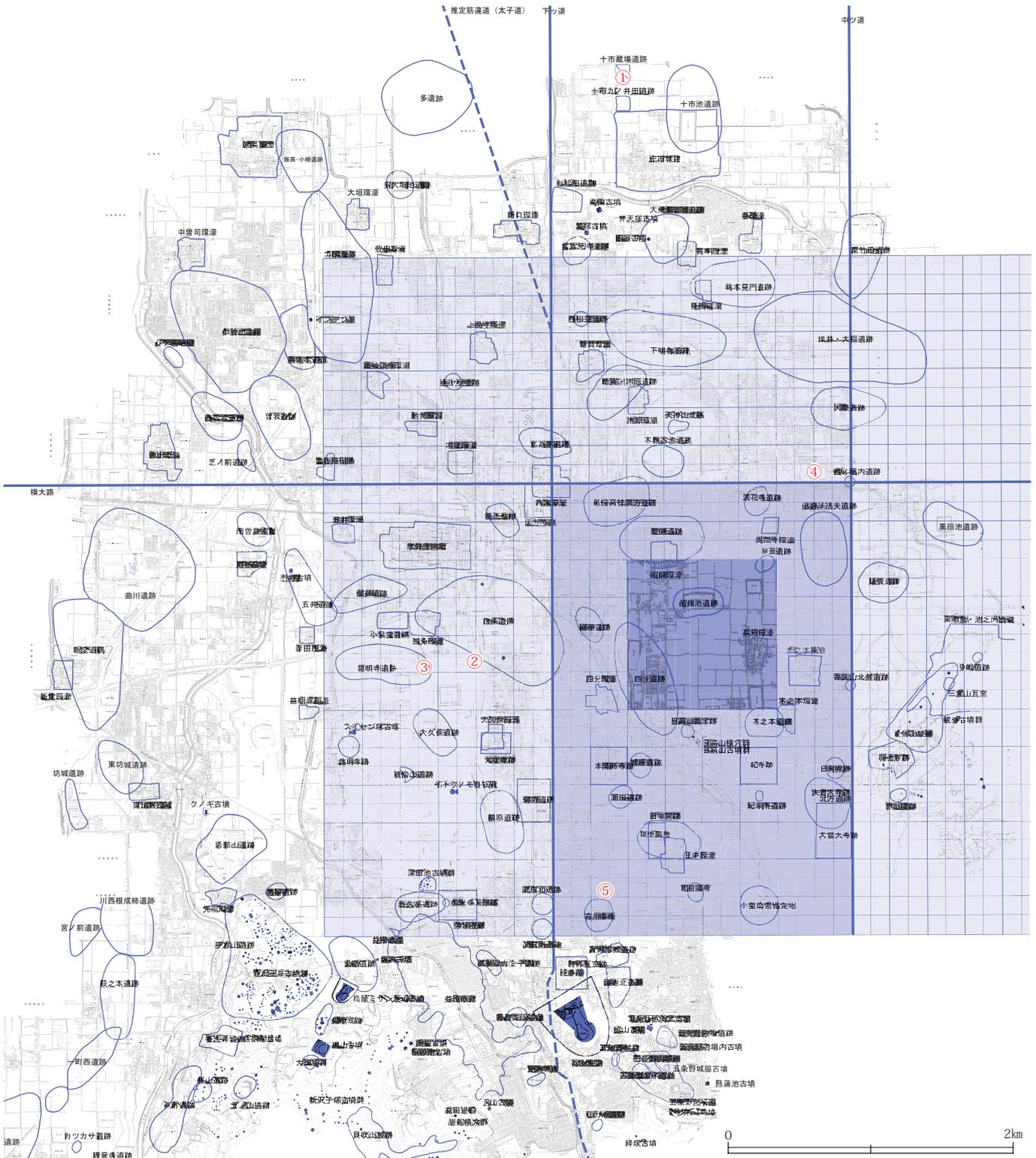
# I. 埋蔵文化財発掘調査事業

## 平成29年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査回数	遺跡名	調査地	調査面積	調査期間 (平成)
①	2017 - 1次	十市町遺跡有無確認試掘調査 (2016 - 9次調査から継続)	十市町258他17筆	1,400.0㎡	29.3.6~29.4.28
②	2017 - 2次	藤原京右京五条六・七坊	四条町44 - 7他6筆	576.0㎡	29.7.20~29.11.17
③	2017 - 3次	藤原京右京五条八坊、慈明寺遺跡	四条町88	1,324.0㎡	29.11.16~30.3.13
④	2017 - 4次	藤原京左京北一条三・四坊	石原田町139 - 2他2筆	150.0㎡	30.2.5~30.3.15
⑤	試掘・確認調査	藤原京右京十一条三坊	石川町247 - 6他1筆	8.8㎡	29.9.7

調査回数は、発掘調査開始時に当教育委員会が付したものである。またNo.は下記位置図の数字と対応している。なお、⑤は国庫補助による試掘・確認調査であり、これには調査回数を付与しない。

また、平成29年4月3日～平成30年3月31日まで、京奈和「大和・御所区間(橿原市域)」埋蔵文化財調査整理業務を実施した。



平成29年度 埋蔵文化財発掘調査地位位置図 (S=1/40,000)

# I . 埋蔵文化財発掘調査概要報告

榎教委 2016 - 9・2017 - 1 次

## 十市町遺跡有無確認試掘調査

調査地 十市町 258 他 17 筆

調査期間 平成 29 年 3 月 6 日～平成 29 年 4 月 28 日

調査面積 1,400 m<sup>2</sup>

調査原因 駐車場造成

### 1. はじめに

今回の発掘調査は榎原市十市町において提出された遺跡有無確認踏査願に基づく試掘調査である。調査地の現況は農地（水田が主、一部に畑地を含む）である。試掘調査に先立ち、平成 29 年 2 月 16 日に現地踏査を実施しているが、現地表面の観察だけでは遺構・遺物の存在を十分に確認することが出来なかった。その為、試掘調査を実施することとなった。

調査は平成 29 年 3 月（1～4 区。2016 - 9 次調査）と同年 4 月（5～8 区。2017 - 1 次調査）に実施している。年度をまたぐ都合上、個別の調査次数を付与してはいるものの、同一の事業に基づく調査であり、その成果も一連のものであることから、ここに一括して報告を行う。

調査地は榎原市域の北端部に位置しており、敷地の北辺は磯城郡田原本町の町域に接している。調査地は遺跡外であるが、周辺に目を向けると十市城跡、十市池遺跡等の遺跡が存在している。

十市城は十市氏が中世から近世初頭にかけて居城とした平城である。調査地南東端から約 250 m 南東の地点に、主郭跡である一辺約 70 m 四方・高さ約 1 m の微高地が現在も残る。こ

の主郭を中心に城や町屋が広がっていたことが周辺の地割や地名、史料等から知ることが出来る。主郭周辺での発掘調査では 15～16 世紀の大溝から高麗製青磁や中国製白磁・青磁等も出土している。ただし十市城跡では発掘調査がほとんど行なわれておらず、城の詳細な姿についてはなお不明な点が多い。また、十市城跡の範囲内を南東から北西に通る形で寺川の旧流路が存在しており、調査地の南方一帯にその地割の乱れが明瞭に残っている。寺川は十市城が用いられていた中世のある時期に現在の形に付け替えられている。

十市池遺跡は調査地の東方に所在する弥生時代から平安時代にかけての各時代の遺物散布地である。遺跡のほぼ全域が現在も水田地であり本格的な調査も行なわれていないため、詳細は不明であるが近隣に古い遺跡が存在することがうかがえる。

調査地は『大和国条里復元図』によると十市郡路東二十条一里にあたる。字名は調査地北部（1・2 区）が「蔵場」および「西蔵場」、中央部（3～5 区）が「坊天」、南部（6～8 区）が「九ノ井田」である。「坊天」と「九ノ井田」の間には、水路として整備されている十市川が流れる。

### 2. 調査概要

調査地一帯ではこれまでに調査例が無く、まず全体の遺構・遺物の広がり把握する必要があるため、調査地全体に広がる形で 8ヶ所に調査区を設定している。調査区には北西から順に 1 区から 8 区までの名称を付与している。調査の手順は、先に 1～4 区の調査を平成 29 年 3 月中に埋め戻しまで終了した上で、続いて同年 4 月に 5～8 区の調査を実施している。調査担当者は 1～4 区が石坂泰士、5～8 区が杉山真由美である。

調査区は南北に長い長方形で、いずれも東西幅 2 m、南北長が 1・2 区は 95 m、3～8 区は 85 m を測る。調査面積は



図1 発掘調査地位置図 (S=1/5,000)



图2 1~4区平面图 (S=1/400)

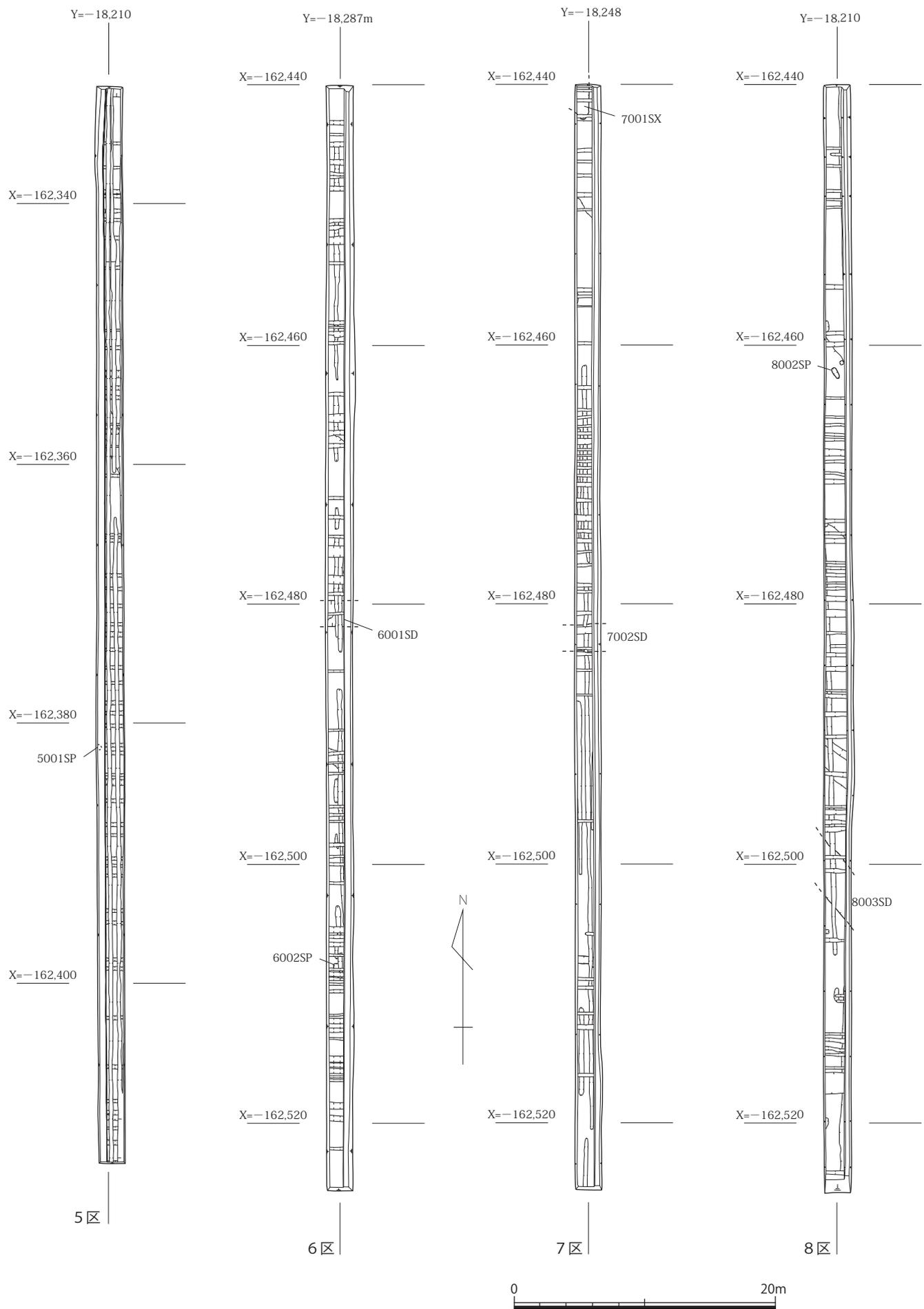


图3 5~8区平面图 (S=1/400)

合計 1,400 m<sup>2</sup>である。

調査は遺構面までを重機で掘削し、以後の作業を人力で進めている。各調査区片側の長辺沿いに排水溝を掘削し、遺構断面および下層の状況把握を行っている。

基本的な層序は各調査区で大きな差異は無く、番号が共通する土層（Ⅰ～Ⅴ層）は、それぞれ対応関係をもつと考えられる。Ⅳ・Ⅴ層は遺物を含まない地山層である。Ⅳ・Ⅴ層は地点によって土色・土質に差異が大きく、形成時期に開きがある可能性もあるが、この上面が遺構面となる点は同じである。Ⅳ層は比較的しまりの良い砂質～粘質土層であり、Ⅴ層は砂～シルト層が中心となる河川堆積性の土層である。Ⅳ層は分布範囲が限られており、Ⅳ層が存在しない地点ではⅤ層上面が遺構面となる形である。なお、遺構面の標高は周辺の地形と同様、概して南から北に向かって低くなるが、後世の耕作活動の影響もあって変化は緩やかである。

以下に調査区ごとに層序と遺構について述べる。出土遺物の一部は図 5 に示す。

#### < 1 区 >

Ⅰ層：現代耕作土（上面の標高約 54.1 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 53.9 m）

Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.6～53.7 m）

Ⅳ層：にぶい褐色土、黄色砂質土（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.5～53.6 m）

Ⅴ層：灰色・青灰色細砂～シルト（上面の標高約 53.4 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝は南北方向が中心で、南北方向より古い東西方向の溝が少数存在する。耕作溝からは少量の瓦器や土師器が出土している。

耕作溝よりも古い遺構として土坑 1 基、溝 2 条、ピット 1 基がある。

1003SK は調査区北部に位置する土坑であり、調査区壁面でのみ確認している。直径約 1.0 m、深さ約 0.4 m を測る円形土坑であると考えられる。出土遺物が無く、時期は不明である。1002SD は調査区中央部に位置する東南東～西北西方向の溝である。幅約 0.8～1.2 m、深さ約 0.2 m を測る。灰黄色砂を埋土とし、遺物は出土していない。1004SD は調査区北端に位置する南東～北西方向の溝であると考えられる。幅約 3.8 m、深さ約 0.4 m を測る。古墳時代後期前半頃の須恵器と土師器が出土している。埋土の一部には粘土ブロックが混ざっており、埋められている可能性がある。1001SP は調査区南端に位置する直径約 0.3 m の円形ピットである。埋土はⅢ層と似ており、中世の遺構である可能性がある。

#### < 2 区 >

Ⅰ層：現代耕作土（上面の標高約 54.1～54.2 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 53.9～54.0 m）

Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

Ⅴ層：にぶい橙色細砂、明黄褐色細砂土、青灰色粘土（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.4～53.6 m）

1 区と同様の耕作溝が調査区全体に存在するが、遺構ベース層であるⅤ層が非常に軟弱であるため検出段階で多くが消失している。

耕作溝より古い遺構として土坑 2 基、溝 2 条がある。

2005SK と 2006SK は調査区中央部に位置する土坑である。2005SK は直径約 0.6～0.8 m、深さ約 0.1 m 以上の楕円形土坑である。2006SK は南北約 2.6 m 以上、東西約 0.5 m 以上を測る土坑で、調査区東側に遺構が広がると考えられる。2005SK と 2006SK からは土師器の小片が出土している。

2001SD は調査区北端に位置する南東～北西方向の溝である。幅約 3.0 m 以上、深さ約 1.0 m を測る。古墳時代中期後半～後期の土師器と須恵器が出土している。埋土の下層は灰色シルト～粘土層であるが、上層は人為的な埋戻土であると考えられる粘土ブロック混じりの褐灰色粘質土である。2002SD は調査区北半に位置する幅約 20 m を超えると想定される大溝である。あるいは流路である可能性もある。深さ最大約 1.1 m を測る。古代の土師器や須恵器等が出土しており、遺物の出土量は今回検出した遺構の中で最も多い。特に遺構の北肩付近からは土器がまとまって出土している。

#### < 3 区 >

Ⅰ層：現代耕作土（上面の標高約 54.5 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 54.3 m）

Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 54.0～54.1 m）

Ⅳ層：黄橙褐色粘質土（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.8 m。調査区北部のみ）

Ⅴ層：褐灰色シルト質粘土～細砂、灰色粘土（上面の標高約 53.7～53.8 m）

遺構は中世以降の耕作溝のみである。1・2 区と異なり、東西方向の耕作溝が多く残る。東西方向が南北方向よりも古い点は同じである。東西方向の溝の規模は幅約 0.4～0.5 m、深さ約 0.2 m で共通する。瓦器や土師器の小片が出土するが量は少ない。

#### < 4 区 >

Ⅰ層：現代耕作土（上面の標高約 54.5 m）

II層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 54.4 m）

III層：灰色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 54.1 m）

V層：橙色混じり明褐色細砂、灰白色微砂～シルト  
（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.9～54.0 m）

遺構は中世以降の耕作溝のみである。耕作溝の状況は3区と同様である。

#### <5区>

I層：現代耕作土（上面の標高約 54.6 m）

II層：黄褐色微砂（床土。上面の標高約 54.4 m）

III層：灰色粘土（中世以降の耕作土。上面の標高約 54.2 m）

IV層：黄褐色～褐色細砂質シルト（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 54.0 m）

V層：灰黄色細砂、灰オリーブ色中砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.9 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。南北方向の耕作溝と、それより古い東西方向の耕作溝が存在する。耕作溝から土師器・瓦器の小片が出土している。

耕作溝より古い遺構としてピット1基がある。

5001SPは調査区南半の西壁沿いに位置し、土層断面のみ確認した。直径約0.5 m、深さ0.5 m、平面形は円形である。埋土は黒色粘土であり、耕作溝とは大きく異なる。遺物は出土していない。

#### <6区>

I層：現代耕作土（上面の標高約 54.0 m）

II層：にぶい黄褐色シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

III層：灰オリーブ色中砂質シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

IV層：黒褐色・明褐色微砂（古墳時代以前の堆積層。上面の標高約 53.3～53.4 m）

V層：灰色中砂、黒褐色粘土（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.1～53.2 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。東西方向の耕作溝と南北方向の耕作溝が存在する。耕作溝は1～5区と異なり、東西方向よりも南北方向のほうが古い。耕作溝からは土師器・瓦器の小片が出土している。

耕作溝より古い遺構として溝1条、ピット1基がある。

6001SDは調査区中央部に位置する東西方向の溝である。幅約2.0 m、深さ約0.6 mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、底部がやや丸みを帯びる。6001SDの芯の座標は X= -162,480.7 m、Y= -18,287.0 mである。6002SPは調査区南半に位置するピットである。平面形は直径約0.4 m以上の円

形であると考えられる。6001SDと6002SPから遺物は出土していない。

#### <7区>

I層：現代耕作土（上面の標高約 54.0～54.1 m）

II層：灰オリーブ色シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

III層：暗灰黄色・黄灰色微砂質シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

IV層：褐色細砂～中砂（古墳時代以前の堆積層。上面の標高約 53.5～53.6 m。上面が遺構検出面）

V層：黄灰色細砂、灰色粗砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.2～53.4 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝や出土遺物の状況は6区と同様である。

耕作溝より古い遺構として不明遺構1基、溝1条がある。

7001SXは調査区北端に位置する。遺構は調査区の北および西側へと広がっており、南東端のみを確認した状態である。7001SXは検出状態では遺物を多く含むものの遺構の詳細に不明瞭な部分が多かったため、遺構の完掘まで調査を行っていない。平面形は東西約1.1 m以上、南北約3.2 m以上を測る不整形である。深さは約0.2～0.4 mと底面に起伏が見られる。遺構全体から古墳時代前期の土師器が出土している。その他、銅製の釧1点が出土している。7002SDは調査区中央部に位置する東西方向の溝である。幅約2.0 m、深さ約0.5 mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、底部に丸みを帯びる。検出面の標高、埋土の状態、断面の形状から、6001SDと同一の溝である可能性がある。7002SDの芯の座標は X= -162,482.6 m、Y= -18,248.0 mである。遺物は出土していない。

#### <8区>

I層：現代耕作土（上面の標高約 54.0～54.1 m）

II層：暗灰黄色細砂質シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

III層：にぶい黄色・灰オリーブ色シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

IV層：黒褐色粘土（古墳時代以前の堆積層。上面の標高 53.4 m。上面が遺構検出面。南端のみ）

V層：黄灰色粗砂、灰黄色細砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高 53.2～53.5 m。上面が遺構検出面）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝の状況は6区と同様である。耕作溝からは土師器・須恵器・瓦器の小片が出土している。

耕作溝より古い遺構として溝1条、ピット1基がある。

8002SPは調査区北半に位置する長軸約0.9 m、短軸約0.3 mの平面形が楕円形のピットである。8003SDは調査区南半に位置する南東―北西方向の溝である。幅約3.1 m、深さ0.4 mを

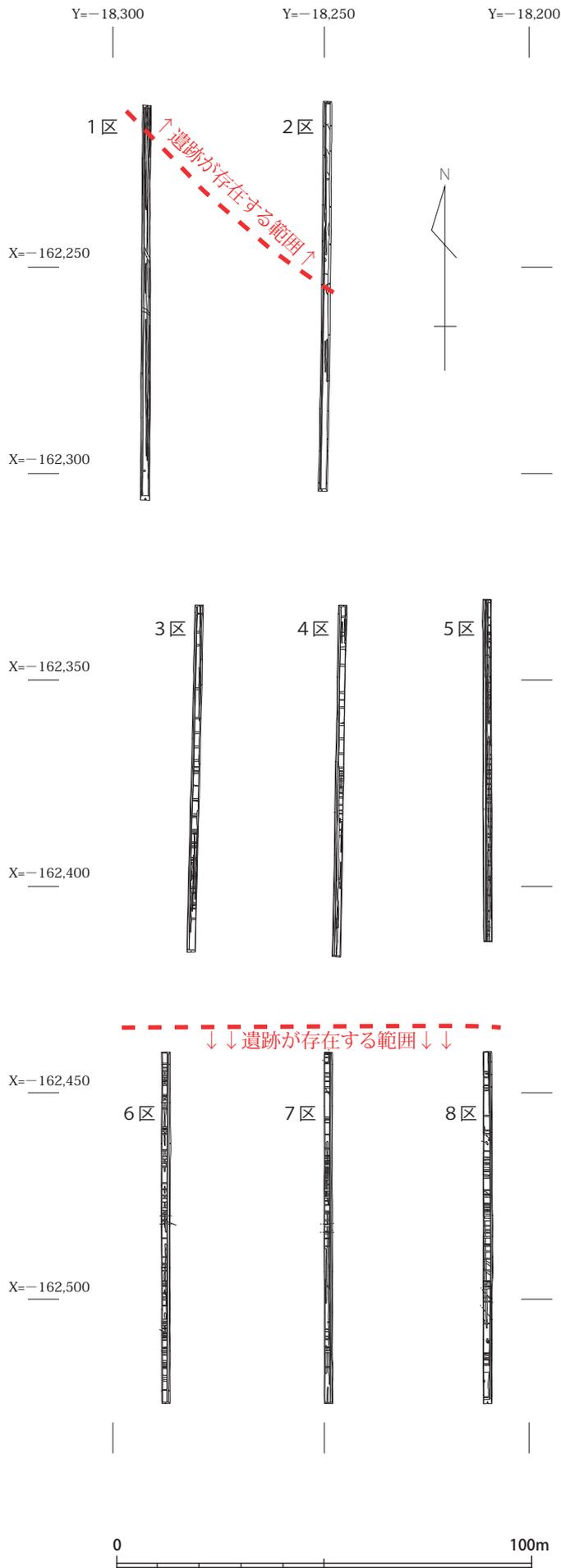


図4 遺跡が確認された範囲 (S=1/1,500)

測る。耕作溝以外の遺構から遺物は出土していない。

### 3. まとめ

試掘調査の結果、古墳時代および古代の遺構が存在することを確認している。時期不明の遺構については、これらと同時期あるいは耕作溝より古い段階の中世である可能性が考えられる。

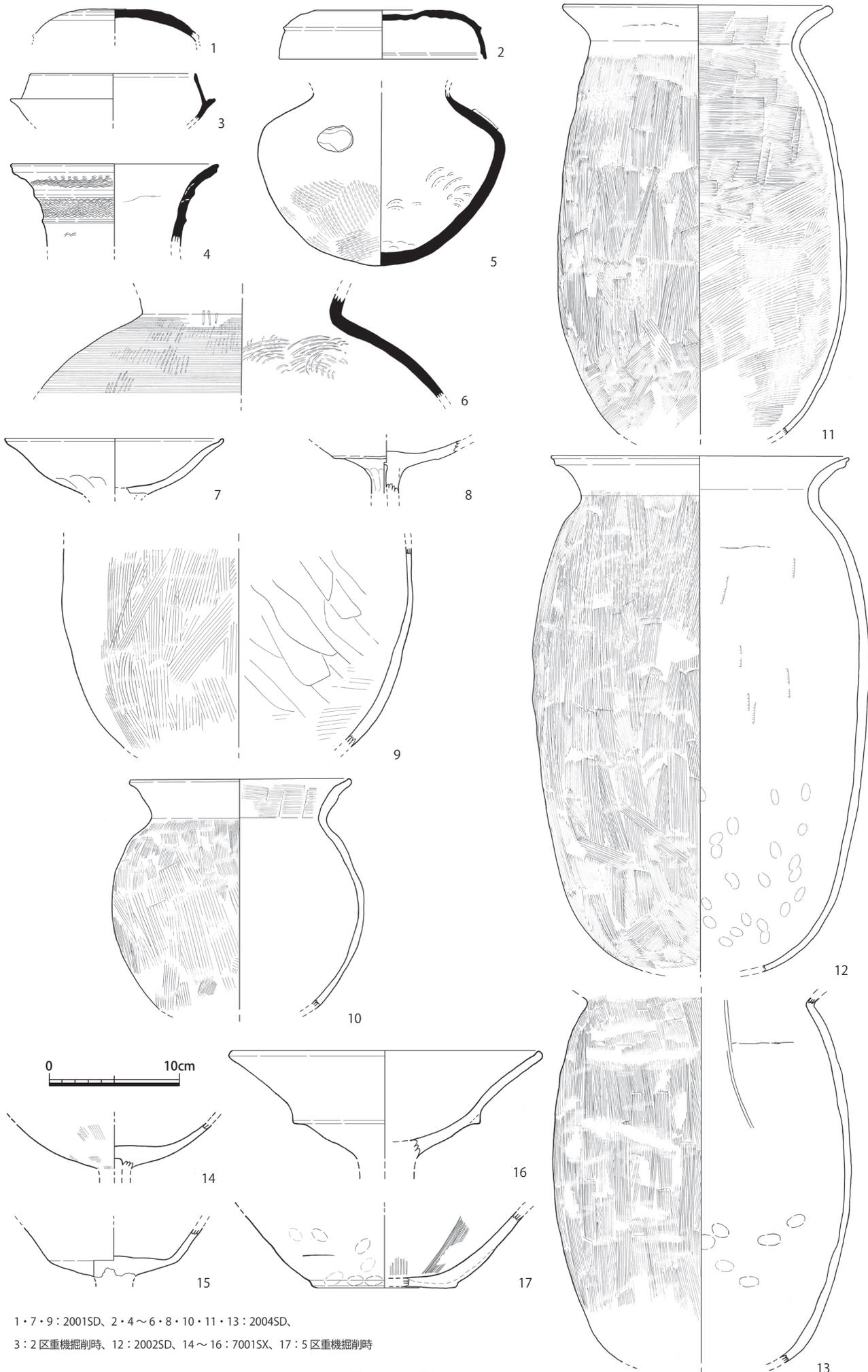
中世以降の時期については、調査地全域に耕作溝が広がり、耕作地としての利用が主であったことを確認している。調査地から南方には十市城が存在することから、中世から近世にかけての城郭や町屋と関連する遺構の存在も想定して調査を進めたが、当該期の遺構は耕作溝のみで目立つ遺物も存在していないことを確認する結果となった。なお、耕作地としての利用実態については調査地北半(1～5区)と南半(6～8区)で若干の違いがあったことが、耕作溝の状況や現在の水田区割からうかがえる。両者の間は、現在の十市川によって隔てられている。

耕作溝より古い時期の遺構は分布範囲が限られ、大きく以下の2つの区域に分けられる(範囲は図4参照)。ひとつは調査地北端部、1区北端から2区北半部にかけての範囲である。古墳時代中～後期の溝や古代の大溝(流路の可能性あり)等の存在を確認しており、これらの遺構からは遺物も一定量出土している。もうひとつは調査地南半、6～8区の範囲である。全体として遺構の量は限られ、時期が明確な遺構は古墳時代前期の7001SXのみであるが、この遺構からは遺物が多く出土している。その他には時期不明の溝があり、うち6001SD・7002SDは一連の区画溝である可能性も考えられる。北は十市川を北限とし、南は調査地から約50m南に残る旧寺川跡(中世後期まで存続か。範囲は条里地割の乱れや字名等から推測される)を南限とする比較的狭い範囲に古墳時代から中世までの遺構が存在すると考えられる。

以上のように調査地の北端部および南半部の一带に遺構が存在することが明らかとなった。今回の工事計画(駐車場造成)では、これらの遺構に対して影響は無いと考えられるため、本発掘調査の実施は不要となった。

なお、調査後、遺構の存在が新たに確認できた範囲について、北側を十市蔵場遺跡、南側を十市九ノ井田遺跡という名称で、新規発見遺跡として遺跡地図への登録を行なっている。遺跡の名称はどちらも該当地点の字名に由来するものである。

(石坂泰士)



1·7·9: 2001SD、2·4~6·8·10·11·13: 2004SD、

3: 2区重機掘削時、12: 2002SD、14~16: 7001SX、17: 5区重機掘削時

图5 出土遺物 (S=1/4)



写真1 1区遺構検出状況 -北から-



写真2 2区遺構検出状況 -北から-



写真3 3区遺構検出状況 -北から-

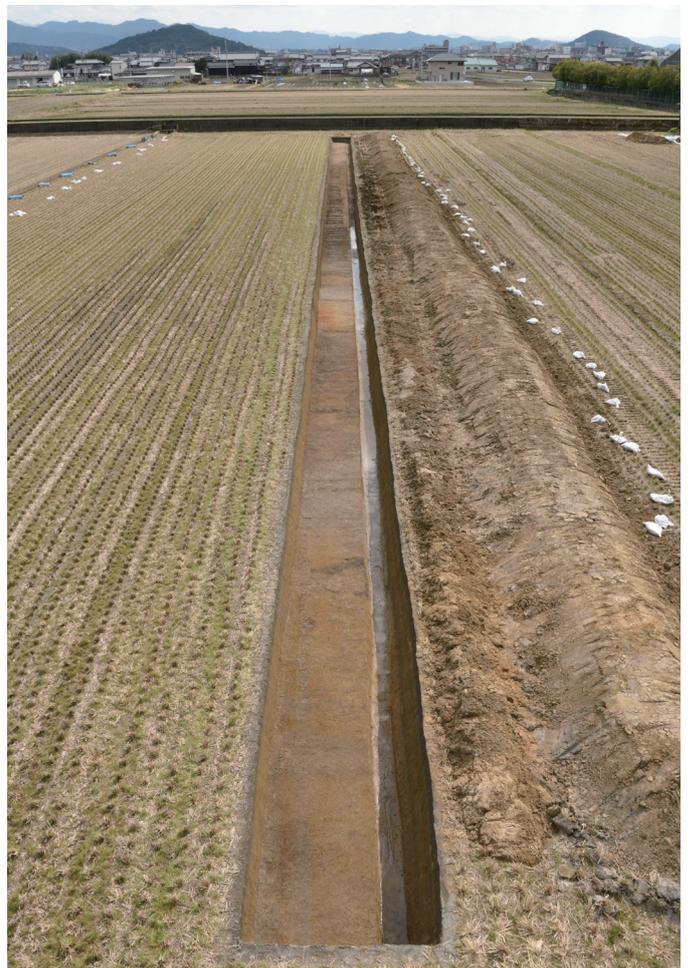


写真4 4区遺構検出状況 -北から。左奥は耳成山、右奥は畝傍山-



写真5 5区遺構検出状況 -北から-



写真6 6区遺構検出状況 -北から-



写真7 7区遺構検出状況 -北から-



写真8 8区遺構検出状況 -南から-



写真9 1004SD 検出状況 - 南東から -



写真10 2001SD 検出状況 - 南東から -



写真11 2002SD 北肩検出状況 - 北北東から -



写真12 2002SD 北肩付近土器出土状況 - 東から -



写真13 2006SK 検出状況 - 北西から -



写真14 6001SD 土層断面 - 西から -



写真15 7001SX 検出状況 - 北から -



写真16 7002SD 土層断面 - 西から -

# 藤原京右京五条六・七坊

調査地 四条町 44 - 7 他 6 筆

調査期間 平成 29 年 7 月 20 日～平成 29 年 11 月 17 日

調査面積 576.0 m<sup>2</sup>

調査原因 市道 慈明寺町・四条町線事業

## 1. はじめに

調査地は桜川右岸、畝傍山の北東に位置する。調査地の北には綾靖天皇陵、南側には神武天皇陵が存在する。

調査地は藤原京の範囲に含まれ、藤原京復原条坊の呼称では右京五条六坊西南坪・同七坊東南坪に該当し、調査地の東寄りに西六坊大路の推定線が通る。調査地近隣では、北に約 300 m の地点で榎原考古学研究所が実施した四条遺跡第 27 次調査で西六坊大路と四条条間路の交差点が確認されている（奈良県平成 12 年度調査）。調査地の西隣で榎原市が実施した発掘調査では西七坊大路を確認している（榎教委 2015 - 2 次）。

また、調査地のすぐ北には、多数の古墳（四条古墳群）や渡来系遺物等が確認された四条遺跡が立地する。榎教委 2015 - 2 次調査でも埋没古墳を確認しており、四条古墳群の広がりを考えるうえで重要な成果を得ている。

## 2. 調査概要

調査区の規模は 576.0 m<sup>2</sup>（東西 144.0 m × 南北 4.0 m）である。排土置場の都合上、調査区を東・西に二分割し、期間の前半に調査区西半部の調査、後半に東半部の調査を行っている。

調査区の基本層序は以下の通りである。

I 層：現代造成土（上面の標高 66.2 ～ 67.3 m。東が高い）

II 層：黄灰色細砂質シルト（耕作土。上面の標高 66.2 ～ 66.3 m。東が高い）

III 層：灰～黄灰色シルト～細砂（旧耕作土。上面の標高 66.0 m）

IV 層：褐灰色粗砂・細砂質シルト（藤原京期頃の整地層。上面の標高 65.7 ～ 65.8 m、西が高い。上面が調査区中央～東寄りでの上・下層遺構検出面）

V 層：灰黄色細砂、灰色粘質シルト、灰白色極細砂（弥生時代以前の自然堆積層。上面の標高 65.6 ～ 65.9 m。西が高い。上面が調査区西寄りでの上層・下層遺構検出面。厚さ約 1.0 m 以上）

IV 層は藤原京期頃の整地層と判断し、上面が藤原京期の遺構検出面となる。IV 層からは古墳時代～藤原京期頃の土師器・須恵器・瓦片・土製品・鉄滓等（図 9 - 6・18・21・23、図 10 - 6・13・15、図 11 - 1・7・8）様々な遺物が出土している。IV 層は調査区中央から調査区東端まで広がり、調査区西寄りに

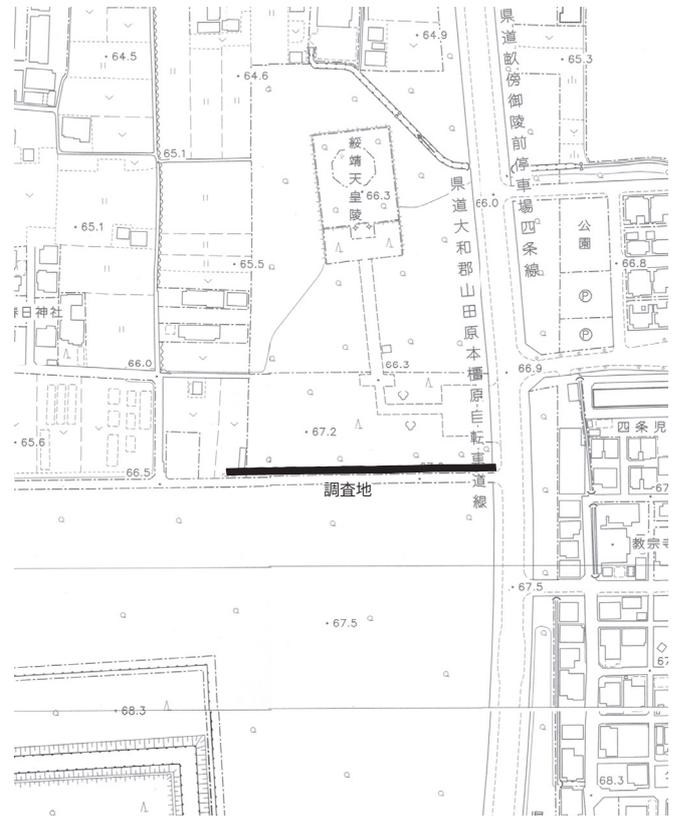


図6 発掘調査地位置図 (S=1/4,000)

は存在しない。

上記IV・V層上面までを重機で掘削、除去し、遺構の検出等の作業は人力で実施している。遺構検出は調査区中央東寄りではIV層上面、調査区中央西寄りではV層上面において実施している。

### ○上層遺構（鎌倉時代以降）

耕作溝多数、ピット 9 基、土坑 2 基を検出している。

耕作溝は調査区全域に存在し、東西方向・南北方向に掘削されている。調査区西半では南北方向溝が東西方向溝より古い傾向にあるが、調査区東半では東西方向溝が南北方向溝より古い傾向にある。上層遺構からは藤原京期の土師器・須恵器・瓦片（図 9 - 14、図 10 - 28、図 11 - 6）が出土しているが、瓦器片も出土しており、最も古い段階のもので鎌倉時代以降の掘削と判断する。調査区中央に位置する南北方向の耕作溝からは、唐三彩と考えられる陶器片が出土している（図 10 - 29、写真 17）。

ピットは平面形状円形か隅丸方形のものが存在する。ピット 1 は直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m、平面形状円形のピットである。ピットの底に据えられた状態で、底部を欠損した焙烙が出土している。焙烙は 17 世紀後半頃のものである。他のピットの詳細な時期は不明であるが、耕作溝より新しい傾向がある。

土坑 1 は直径約 0.8 m、深さ約 0.2 m の平面形状円形と判断できる土坑である。土坑 2 は直径約 1.3 m、深さ約 1.4 m の平面形状円形の土坑である。湧水が豊富であり、井戸として利用されていたと想定できる。井戸枠は存在しておらず、野井戸であったと考えられる。

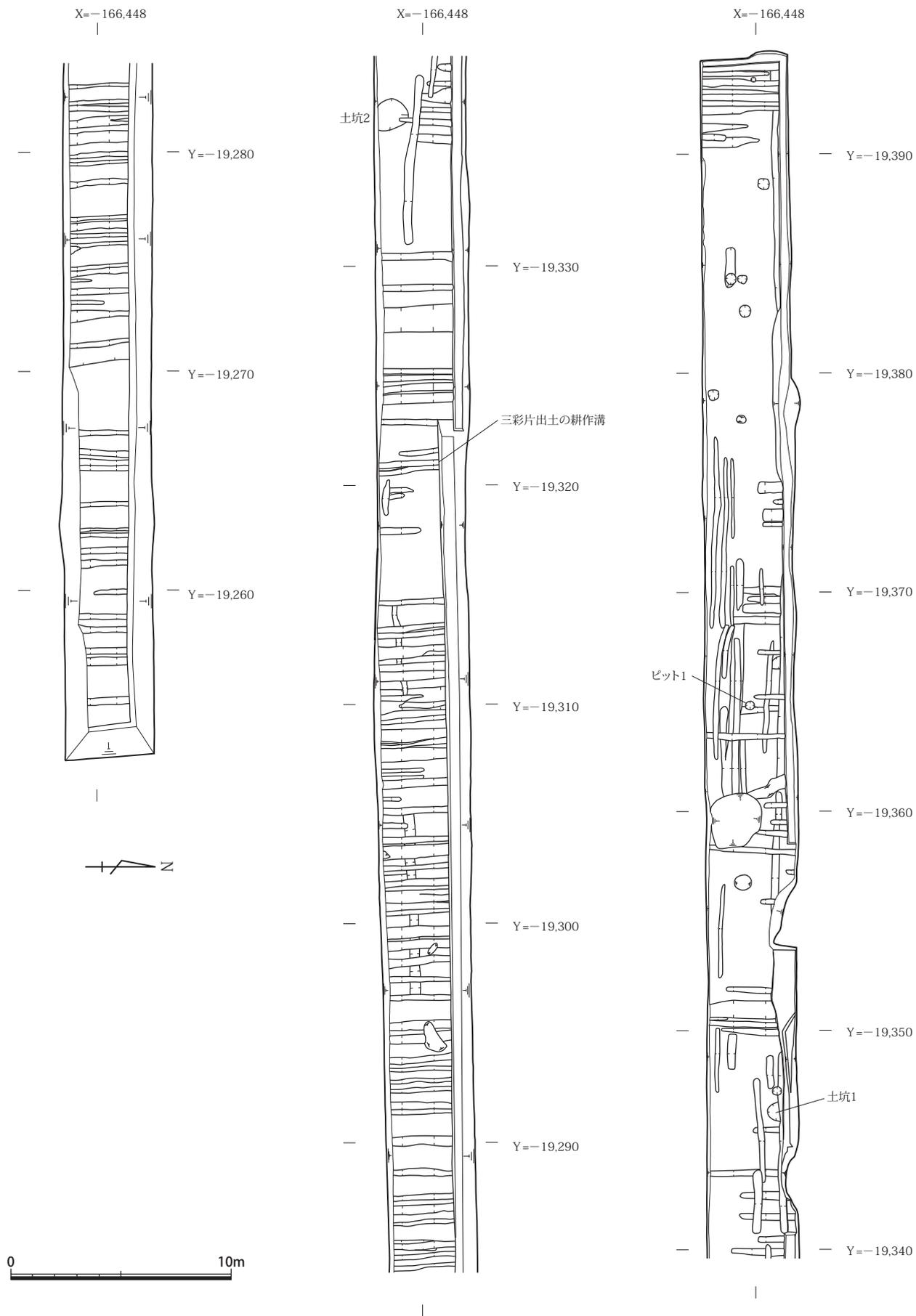


図7 上層遺構平面図 (S=1/250)

○下層遺構

①藤原京期の遺構

遺構は調査区全域に存在し、溝 (209・212・217～

219SD)、土坑 (203・206～208・214SK)、ピット (204・205・210・211・221～236SP) を確認している。以下、主な遺構について記述を進める。

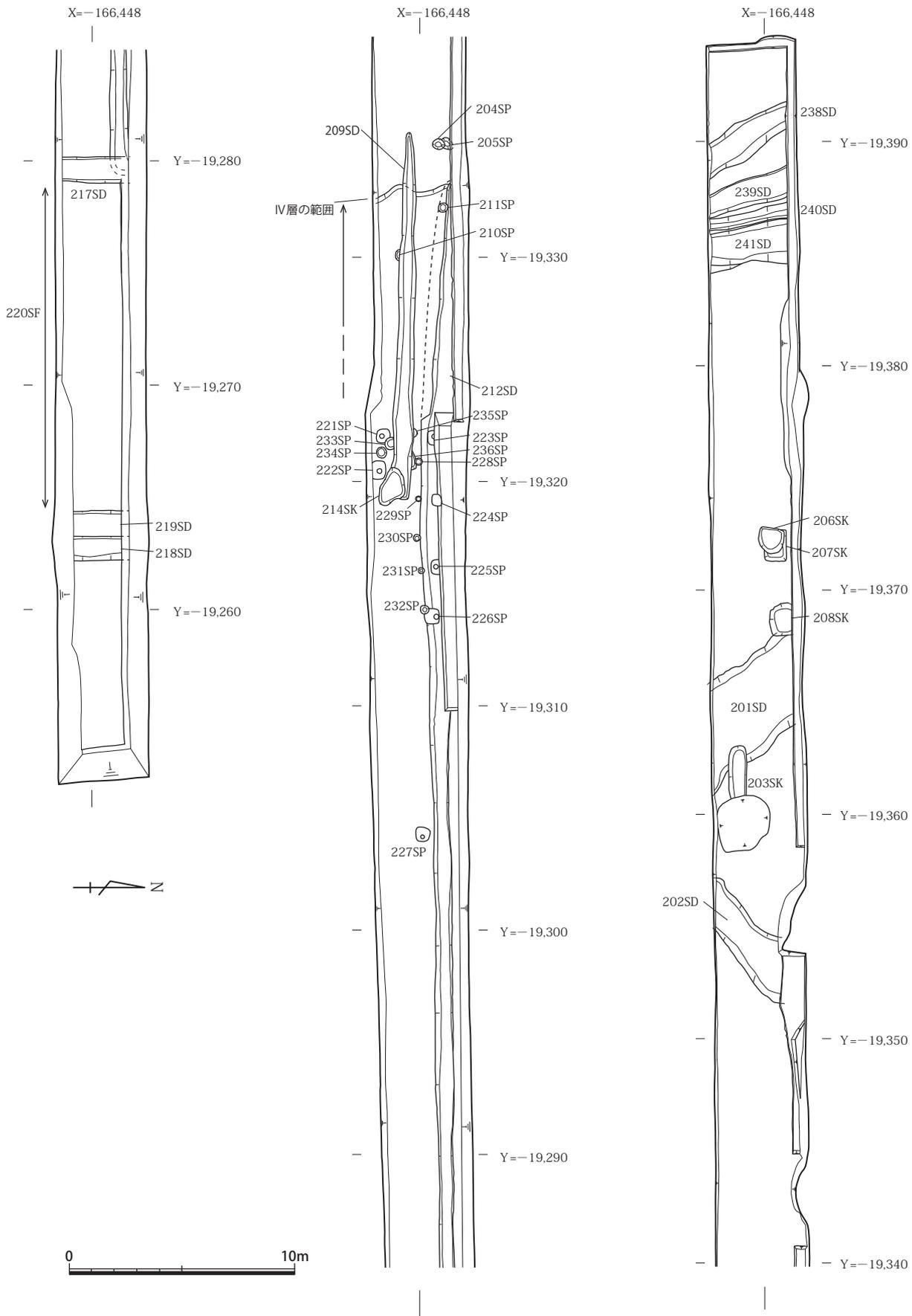


図8 上層遺構平面図 (S=1/250)

209・212SDは東西方向の溝である。209SDは幅約0.9m、深さ約0.6m、断面形状はU字形を呈す。土師器・須恵器・土製品（図9-10・13・20、図10-4・10・12・16～18・22、図11-2）の他、燃えさし等多量の遺物が出土し

ている。212SDは幅0.8m以上、深さ約0.5m、断面形状逆台形を呈す。212SDの北肩は調査区外に存在するが、調査区内で北側の底部分を確認したため溝であると判断している。土師器・須恵器・土製品・鉄滓等の遺物（図9-2・4・5・7・

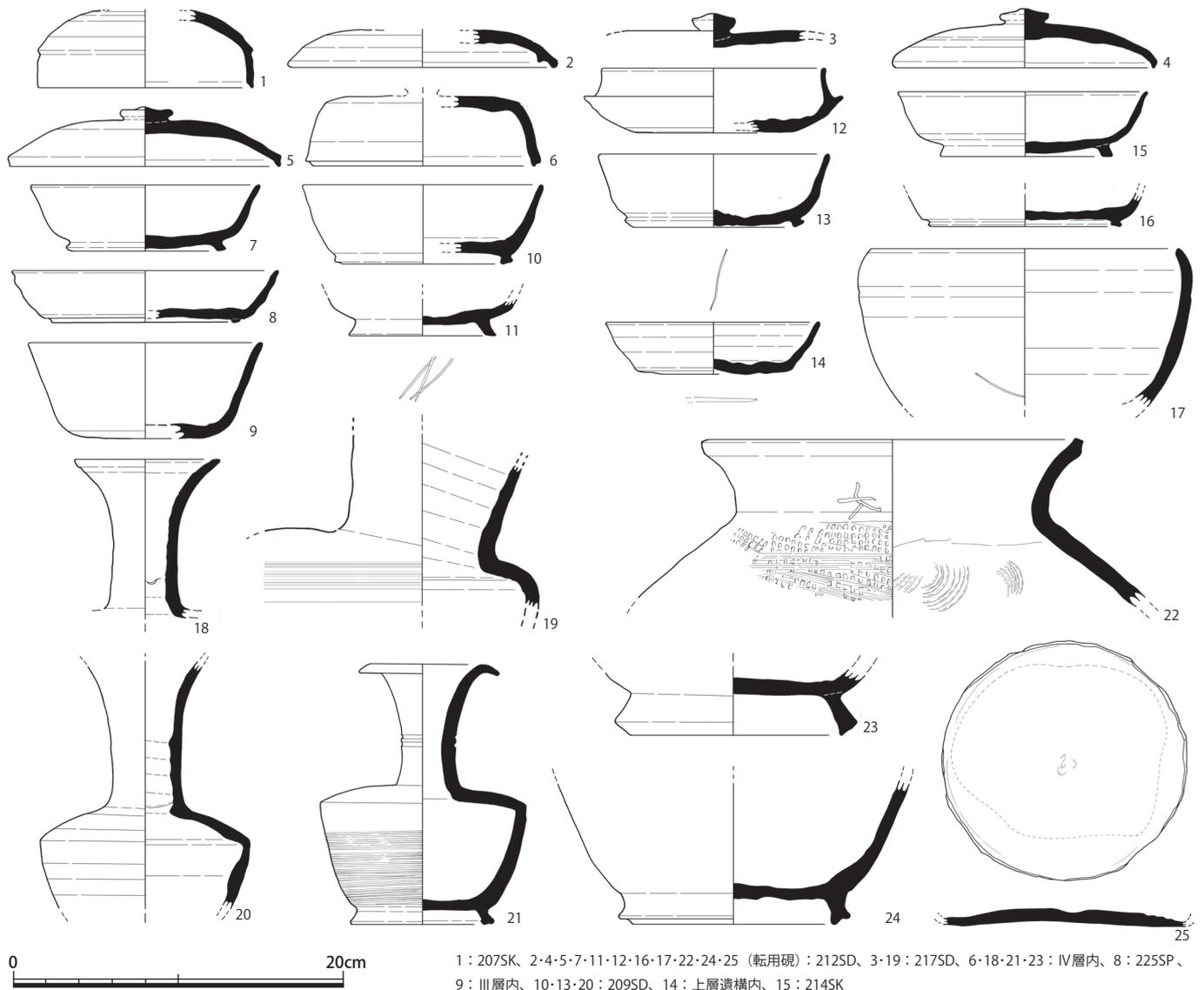


図9 出土遺物 (S=1/4)

11・12・16・17・22・24・25、図10-2・5・7・8・14・19・25・27、図11-3・9)が多量に出土している。212SDは217SD(220SF西側溝)より古く、217SDより東には延びない。212SD出土土器は217SD出土土器よりやや古相のものを含むが、大きな時期差は見られない。なお、209・212SDは五条七坊東南坪内に存在するが、それぞれの溝芯の座標から、東南坪を均等に分割する区画溝ではないと判断している。

217SDは幅約1.1m、深さ約0.4m、断面形状逆台形を呈す。土師器・須恵器(図9-3・19、図10-3・20)が多量に出土している。218SDは幅約1.1m、深さ約0.6m、断面形状はいびつな逆台形で東側が深い。219SDは幅約1.1m以上、深さ約0.5m、断面形状はいびつな半円形を呈す。219SDは、218SDによって東側が破壊されている。218・219SDからは土師器片が出土している。217～219SDは検出位置から西六坊大路(以下、220SF)道路側溝と考えられ、217—218SD間の溝芯々間距離は約17mを測る。路面幅は217—219SD間で14.5m、217—218SD間で15.5mとなる。

214SKは最大径約1.5m、深さ約0.5m、平面形状不整形

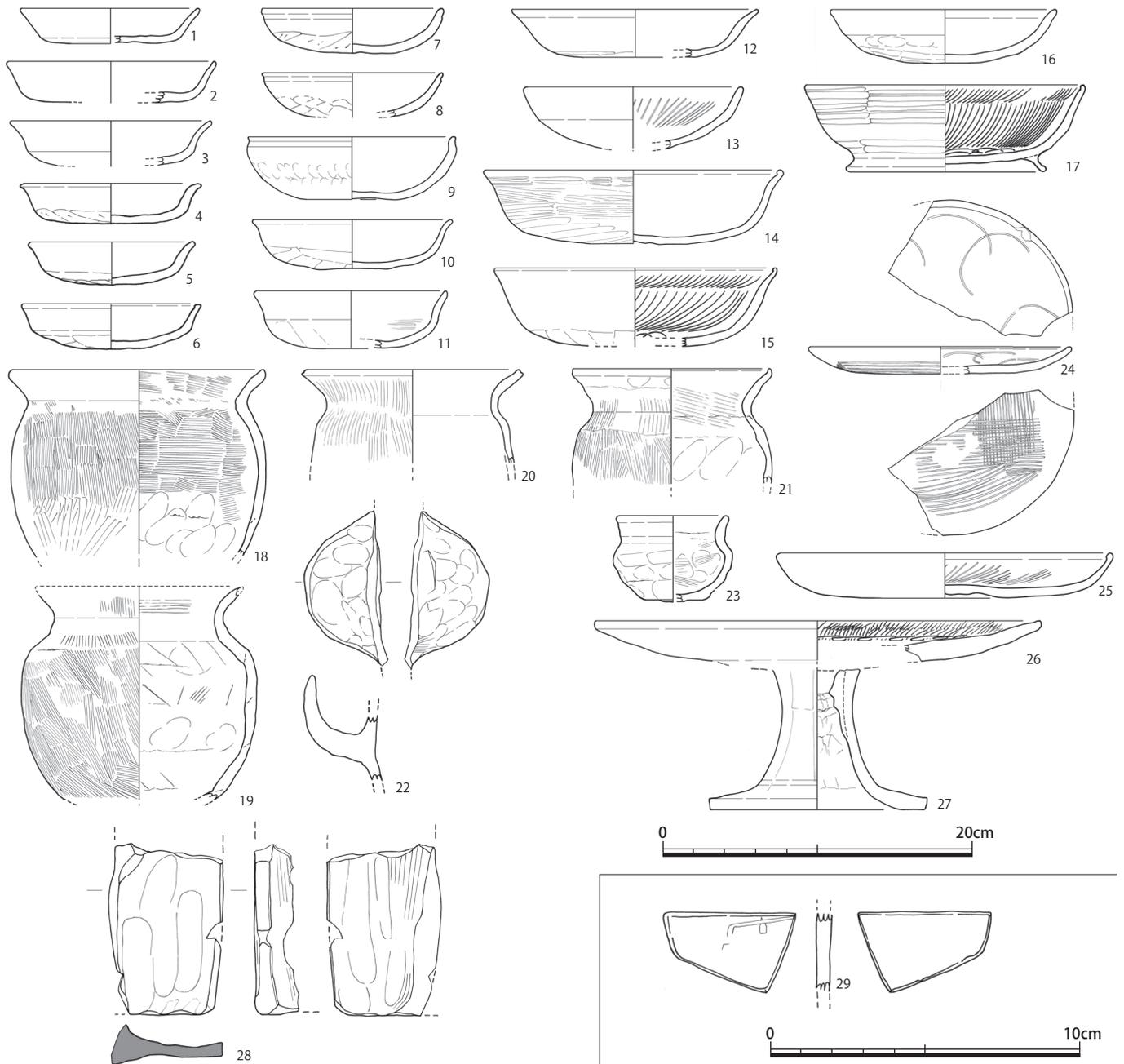
の土坑である。土師器・須恵器・土製品(図9-15、図10-9・11・21・23・26、図11-4)の他、炭化物や燃えさし等が多量に出土している。214SKは209SDより新しい。

ピットは調査区中央～東寄りに集中し、平面形状隅丸方形・円形のものがある。ピットの規模は直径0.2～0.5m程である。現地での検討を重ねたが、明らかに建物を形成していたと判断できるピット群は存在しない。228～232SPは柵か塀を構成していた可能性がある。210・221・233・235・236SPは209SDより古く、211・223～226・228～232SPは212SDより新しい。

#### ②藤原京期より古い遺構

溝(201・202SD)を確認している。

201SDは南東—北西方向の溝で、幅約3.7m、深さ約0.4m、断面形状半円形を呈す。遺物は埋土上層に集中しており、弥生土器の小片が出土している。202SDは南西—北東方向の溝で、幅約2.1m、深さ約0.3m、断面形状半円形を呈す。弥生時代中～後期の土器が出土している。弥生時代後期以降に埋没した遺構と判断できる。



1・24：Ⅲ層内、2・5・7・8・14・19・25・27：212SD、3・20：217SD、4・10・12・16～18・22：209SD、6・13・15：Ⅳ層内、9・11・21・23・26：214SK、28（竈）・29（三彩片）：上層遺構内

図10 出土遺物（29のみS=1/2、他はS=1/4）

### ③時期不明の遺構

調査区西端で4条の溝（238～241SD）を確認している。埋土の状態から流水があったと考えられる。土師器の小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。耕作溝に破壊されていることから、少なくとも中世以前に埋没したことが想定できる。

### 3. まとめ

今回の調査では、中世以降、藤原京期、藤原京期以前、時期不明の遺構を確認している。調査地近隣では、橿教委2015-2次調査をはじめ、古墳時代中期頃の古墳を確認しているが、当該地には存在しない。212SDから埴輪片が一点出土したことや、Ⅳ層内から古墳時代の須恵器が出土していることから、近隣に古墳時代の遺構が存在する可能性がある。

### ○220SFについて

前述のとおり、当該地では東端に西六坊大路の推定線が通る。調査区東端で確認した220SFは西六坊大路道路側溝である可能性がある。220SFの溝芯々間距離は217SD—218SD間で約17m・48大尺（217SD—219SD間であれば約16m・45大尺の可能性あり）であり、藤原京の一般的な大路（約16m・45大尺）と近い数値である。220SFと、①西七坊大路検出例（橿教委2015-2次）および、③西六坊大路西側溝検出例（奈良県平成12年度調査）の各条坊遺構の道路芯及び溝芯の座標は以下の通りである。

①西七坊大路道路芯 X= -166,450.0、Y= -19,536.7

②220SF道路芯（217SD—218SD間の値）

X= -166,448.0、Y= -19,271.3

③西六坊大路西側溝 X= -166,120.0、Y= -19,280.7

④ 217SD (220SF 西側溝)

X= - 166,448.0、Y= - 19,279.8

調査地周辺での西六坊大路道路芯は、大路間の距離を 750 大尺 (265.5 m) とすると ① から、X= - 166,449.3、Y= - 19,271.5 付近であると想定できる。② Y 座標は - 19,271.3 m であり、想定される西六坊大路道路芯の Y 座標の数値に近い数値となる。③と④の振れは N-0° 9' 26" -W となり、③は④のほぼ真北に位置しており、一連の南北溝であると想定できる。

以上、220SF は西六坊大路であったことが、遺構の規模と近隣の調査成果との位置関係から明らかである。

○出土遺物について

以下、出土遺物のうち、三彩片と瓦について述べる。

出土した三彩片は枕であり、枕面に接する側面上端部の破片であると想定できる。本資料の胎土分析の結果 (図 12)、胎土

の成分元素の割合が奈良三彩と異なる特徴を示したことから奈良三彩ではないと判断できる。また、白色釉は透明であり、胎土は精緻で赤みを帯びる等の特徴から、中原の唐三彩であると考えられる。本資料は耕作溝からの出土であるため、詳細な時期は明らかではないが、唐三彩の製作年代 (7~9 世紀) に対応する時期の遺構は藤原京期の遺構のみであり、当資料も藤原京期の遺物であった可能性が高い。

瓦は軒瓦が 2 点、平瓦・丸瓦がコンテナ 1 箱弱出土した。複弁蓮華文軒丸瓦 (図 11 - 5) は調査区西寄りの V 層直上で出土した。奈良文化財研究所の分類で 6272A 型式の瓦に該当すると判断でき、奈良時代前葉頃のものとして想定できる。他の瓦については、製作技法からおおむね藤原京期に収まると判断できる。以上のことから、調査地の近隣において、藤原京期~奈良時代前葉頃の瓦葺建物が存在した可能性がある。

(杉山真由美)

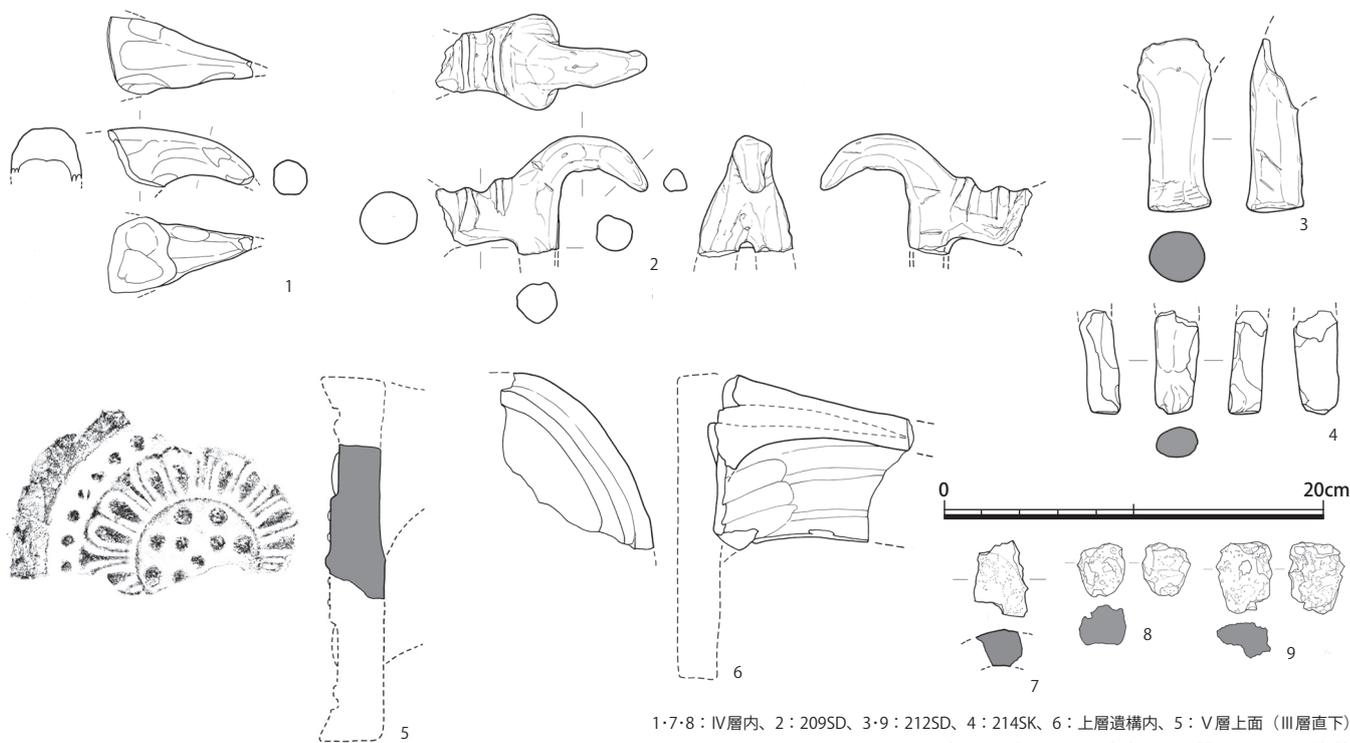
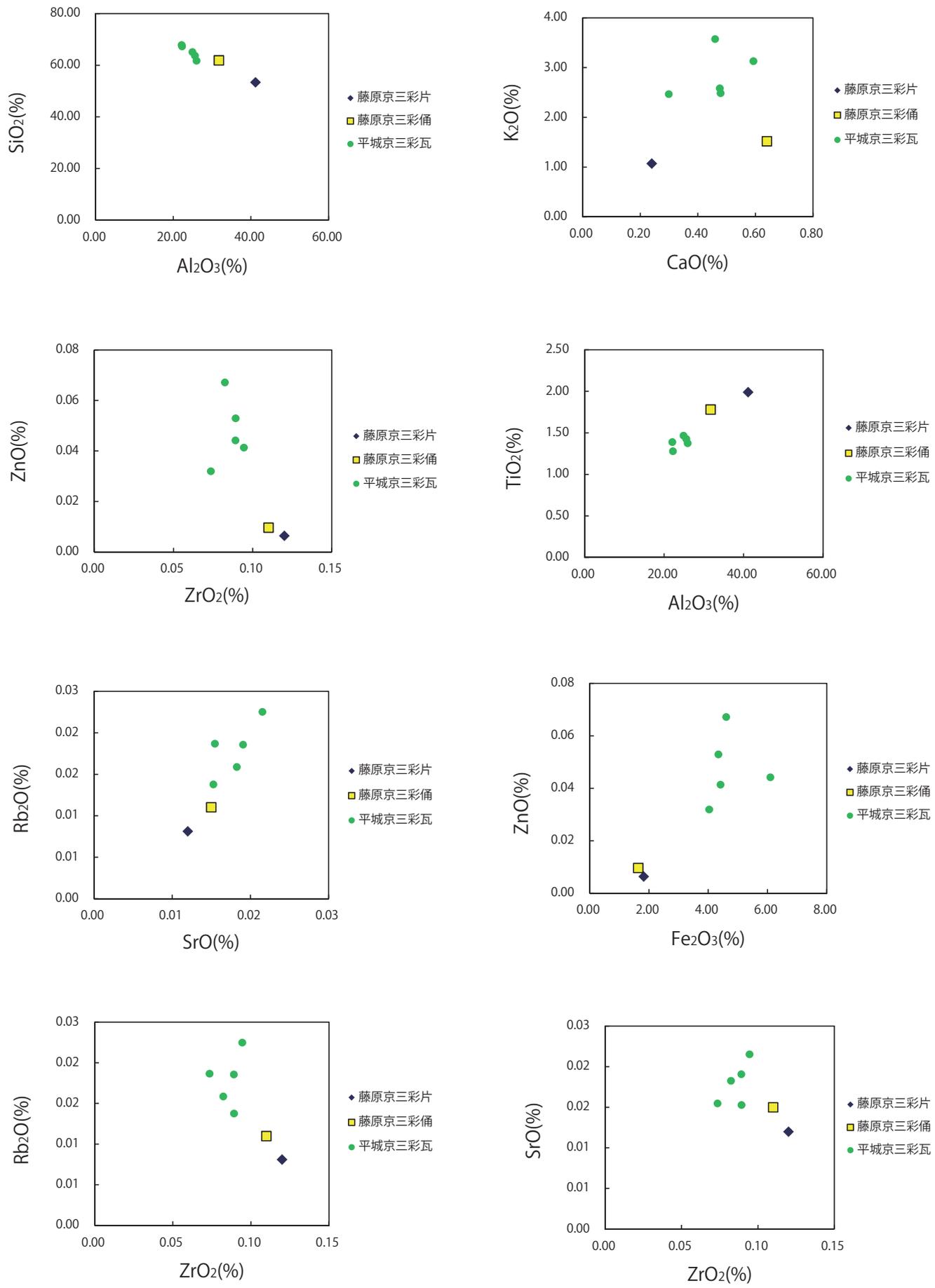


図 11 出土遺物 (S=1/4)



写真 17 三彩片



① (◆) 今回出土した三彩片、② (□) 藤原京出土 (榎教委 1991 - 5 次調査) の三彩筒、③ (●) 平城京出土の奈良三彩瓦の胎土成分を比較したもの。なお、①と②の成分の違いは、産地の違いに由来する可能性がある。

全てのグラフは榎原考古学研究所の小倉頌子氏にご提供いただいた。

図 12 胎土分析の結果



写真18 上層遺構完掘・下層遺構検出状況 - 西から -



写真19 上層遺構完掘・下層遺構検出状況 - 調査区中央東から -



写真20 上層遺構完掘・下層遺構検出状況 - 調査区中央西から -



写真21 上層遺構完掘・下層遺構検出状況 - 東から -



写真22 209SD、212SD 完掘状況 - 調査区中央東から -



写真23 209SD、216SK 完掘状況 - 南東から -



写真24 217・218SD、219SD 完掘状況 - 東から -



写真25 201SD、202SD 完掘状況 - 西から -



写真26 209SD 土層断面 - 西から -



写真27 212SD 土層断面 - 西から -



写真28 218・219SD 土層断面 - 南から -



写真29 217SD、212SD 土層断面 - 南から -

# 藤原京右京五条八坊、慈明寺遺跡

調査地 四條町 88

調査期間 平成 29 年 11 月 16 日～平成 30 年 3 月 13 日

調査面積 1,324.0 m<sup>2</sup>

調査原因 市道 慈明寺町・四條町線事業

## 1. はじめに

調査地は畝傍山の北、旧奈良県農業研究開発センター敷地内に位置する。調査地の東隣に桜川が北西流する。

調査地は藤原京の範囲に含まれ、藤原京復原条坊の呼称では右京五条八坊東南・西南坪に該当し、調査地の中央に西八坊坊間路の推定線が通る。藤原京関連の遺構は、昨年度実施した西隣での発掘調査で、西八坊大路を確認している（橿教委 2016 - 4 次）。桜川を挟んだ東側での発掘調査では、西七坊大路を確認している（橿教委 2015 - 2 次）。今回の調査区のうち、2 区西端の北側約 20 m の地点で実施された橿原考古学研究所による調査で、藤原京期の掘立柱建物が確認されている（奈良県平成 7 年度調査）。

また、調査地は弥生時代の遺物散布地である慈明寺遺跡内に該当する。慈明寺遺跡関連の遺構は以下のとおり、橿原考古学研究所の調査によって確認されている。今回の調査区のうち、2 区中央の北側約 70 m の地点で実施された調査（奈良県平成 2 年度調査）、2 区東端の真南隣接地で実施された調査（奈良県平成 18 年度調査）で、弥生時代前期の自然河道が確認されている。これらの調査では自然河道以外の遺構は確認されなかった。

## 2. 調査概要

調査地の西寄りにある南北方向の里道を挟み、2 つの調査区を設定している。西側の調査区を 1 区、東側の調査区を 2 区としている。調査区の規模は、1 区が 160.0 m<sup>2</sup>、2 区が 1164.0 m<sup>2</sup>、合計 1324.0 m<sup>2</sup>である。

調査区の層序は地点によって変わる。基本層序は以下の通りである。

- I 層：現代造成土（上面の標高 64.5 ～ 65.3 m。西が高い）
- II 層：褐色粘質シルト（耕作土。上面の標高 64.8 m）
- III 層：暗灰黄～暗褐色砂質シルト（旧耕作土。上面の標高 64.7 ～ 64.8 m。西が高い）
- IV 層：灰黄褐色粗砂（古代以前の自然堆積層。上面の標高 64.5 ～ 64.6 m。東が高い。上面が古代・中世以降の遺構検出面）
- V 層：褐色極細砂、暗灰黄色粘土（弥生時代前期頃の自然堆積層。上面の標高 63.7 ～ 64.2 m。西が高い）

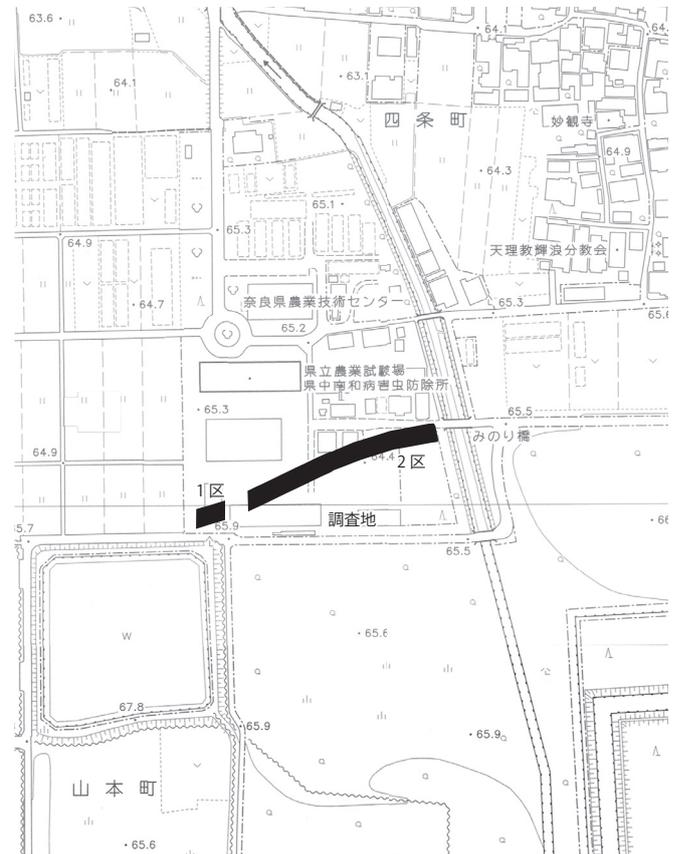


図13 発掘調査地位置図 (S=1/4,000)

VI層：黒褐色粘土（縄文時代後期以前の自然堆積層。上面の標高 63.6 m）

VII層：黒褐～暗緑灰色粗砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高 62.9 ～ 63.7 m。西が高い）

IV層は 1 区～ 2 区西端にのみ広がる。VI層は 2 区中央以東にのみ広がる。なお、2 区中央は大規模な破壊を受けており、I 層直下が V 層となる。

上記 IV・V 層上面までを重機で掘削、除去し、遺構の検出等の作業は人力で実施している。遺構検出は 1 区～ 2 区西端では IV 層上面、それより東側では V 層上面において実施している。

### ○上層遺構（中世以降）

瓦組暗渠、耕作に伴うと考える溝（以下、耕作溝）、河道と想定する遺構 1 基（21001SX）を検出している。

瓦組暗渠は 2 区東端で確認した遺構で、幅 0.3 m、深さ 0.4 m を測る。出土遺物から近世頃の暗渠と判断している。

耕作溝は 1 区と 2 区東端・西端に存在する。耕作溝の方向は大半が南北方向であるが、2 区東端の耕作溝はやや北で西に振れる。耕作溝からは土師器片・瓦器片が出土している。

21001SX は 2 区東端で確認した遺構で、幅 5.0 m 以上、深さ 0.5 m を測る。南西岸のみを検出している。埋土は淡灰黄褐色のシルト～極細砂である。最上層からは、13 世紀頃の瓦器塊（図 18 - 10）が出土しており、遺構の埋没時期を示すと想定できる。

2 区東端では、21001SX 埋没後に耕作溝、続いて瓦組暗渠の順に掘削されている。

○下層遺構

①古代の遺構

〈1区〉ピット 11 基を確認した。建物として復原できるピット群は存在しない。ピットの平面形状は円形ないし隅丸方形である。

〈2区〉建物 (22003SB)、柵 (22004SA) を確認している。

22003SB は 4 基のピットから成り、東西 1 間・南北 1 間以上に復原できる。柱間間隔は 2.1 m を測る。

22004SA は 3 基のピットから成る。ピットには柱の抜き取り穴が残る。抜き取り穴からは土師器片が出土している。一番西側のピットは北側排水溝沿いで部分的に確認しているが、抜き取り穴の有無は不明である。同様のピットは南にも北にも存在しなかった為、柵と判断している。この他、ピット 16 基を確認している。なお、各ピットは深さ 0.1～0.2 m 程度と浅く、遺構面は削平を受けていることが想定できる。

②縄文時代後期以降の遺構 (2区のみ)

南東—北西方向の河道 (22036NR、23001NR、23002NR) を確認している。

22036NR は 2 区東端で確認している河道で、幅 4.6 m、深さ 1.0 m を測る。22036NR の下層からは縄文時代晩期頃の土器が出土しているが、層序から後述の 23001NR より新しい遺構であると判断できる。22036NR は弥生時代前期以降から存在しており、後述する 23001NR との関係から、古代以降に埋没したことが想定できる。23001NR は 22036NR

の西で確認した河道で、最大幅約 16.5 m、深さ 3.0 m 以上を測る。22036NR によって南東岸の一部が破壊されている。23001NR 中層からは弥生時代前期の土器 (図 18 - 1～6) と流木が、下層からは縄文時代後期後葉～晩期の土器・石器 (図 17 - 1・2・4・6・8・14・15) が出土している。埋土は砂礫層から成るため、常に流水があったと考えられる。なお、23001NR 検出面直下の最上層からは須恵器片と平瓦が出土しており (図 18 - 7・8)、古代に埋没したことがわかる。23002NR は 2 区中央で確認している河道で、幅 8.5 m、深さ 2.0 m を測る。23002NR の中～下層からは縄文時代後期後葉の土器 (図 17 - 3・5・8～11) が出土している。埋土は炭化物を含む黒色粘質土層と砂礫層の互層になっており、河道形成後に流水の無い時期が一定期間存在したことが想定できる。これらの河道から出土している土器片や流木はいずれも砂礫層内から出土し、上流から流されてきた遺物であると想定する。

③時期不明の遺構 (2区のみ)

ピット (24001SP)、不明遺構 (24002SX) を確認している。

24001SP は直径 0.4 m、深さ 0.3 m を測り、平面形状円形である。

24002SX は長軸 1.6 m、短軸 0.8 m、深さ 0.4 m を測り、平面形状不整形である。いずれも遺構の時期・機能の詳細は不明であるが、V 層上面が検出面であるため、少なくとも弥生時代前期以降の遺構であると考えられる。

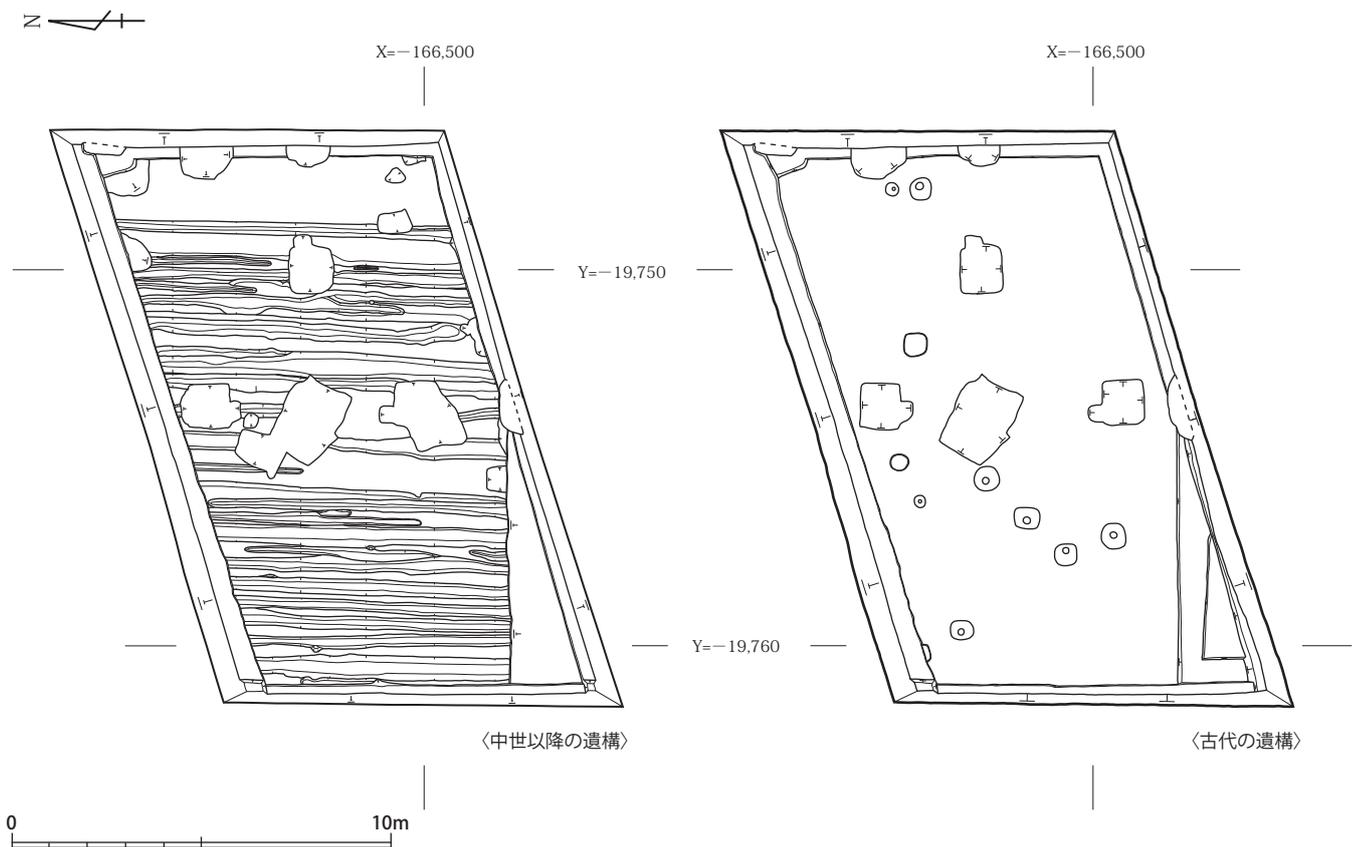


図 14 1区 上・下層遺構平面図 (S=1/200)

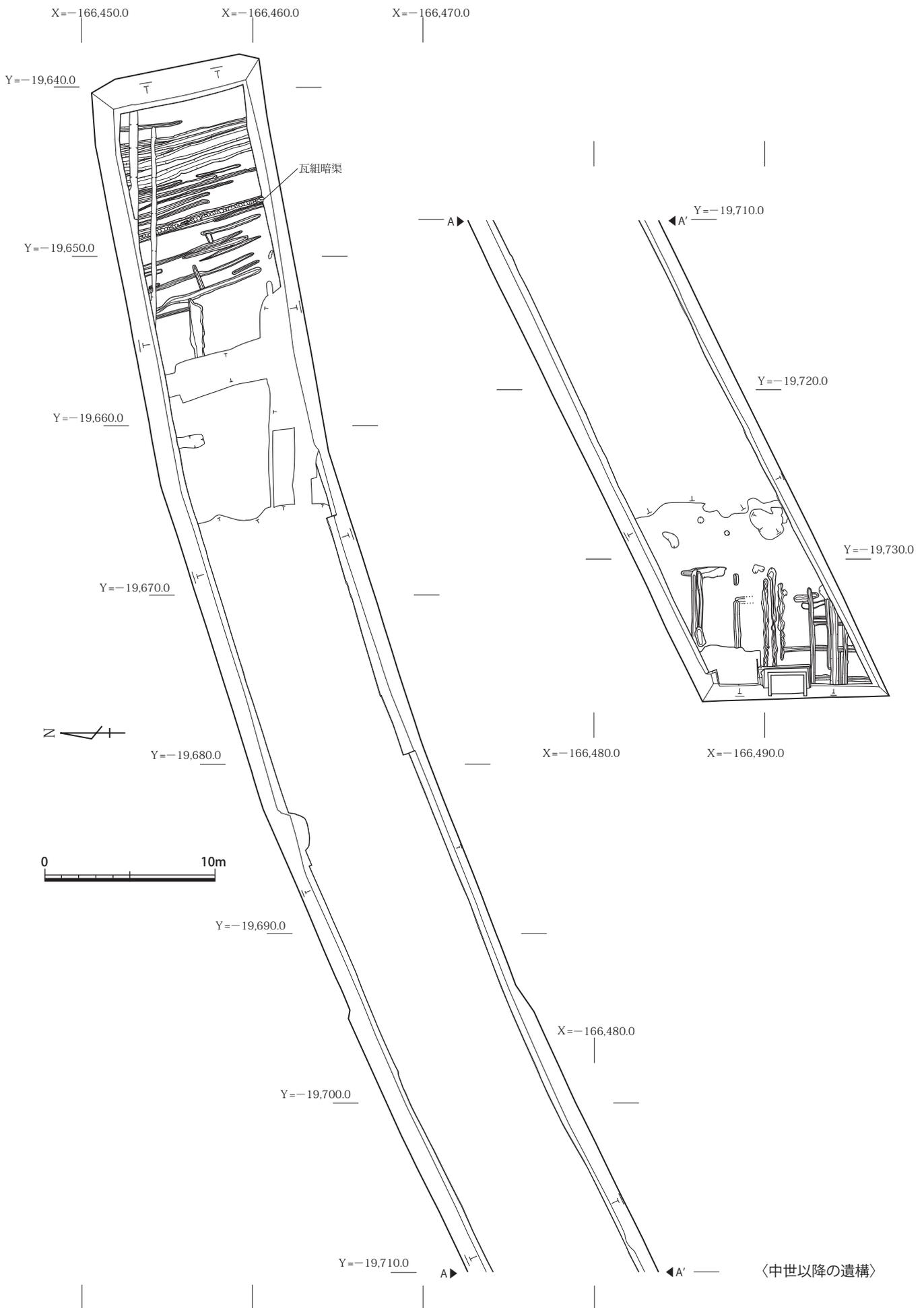


図 15 2区 上層遺構平面図 (S=1/300)

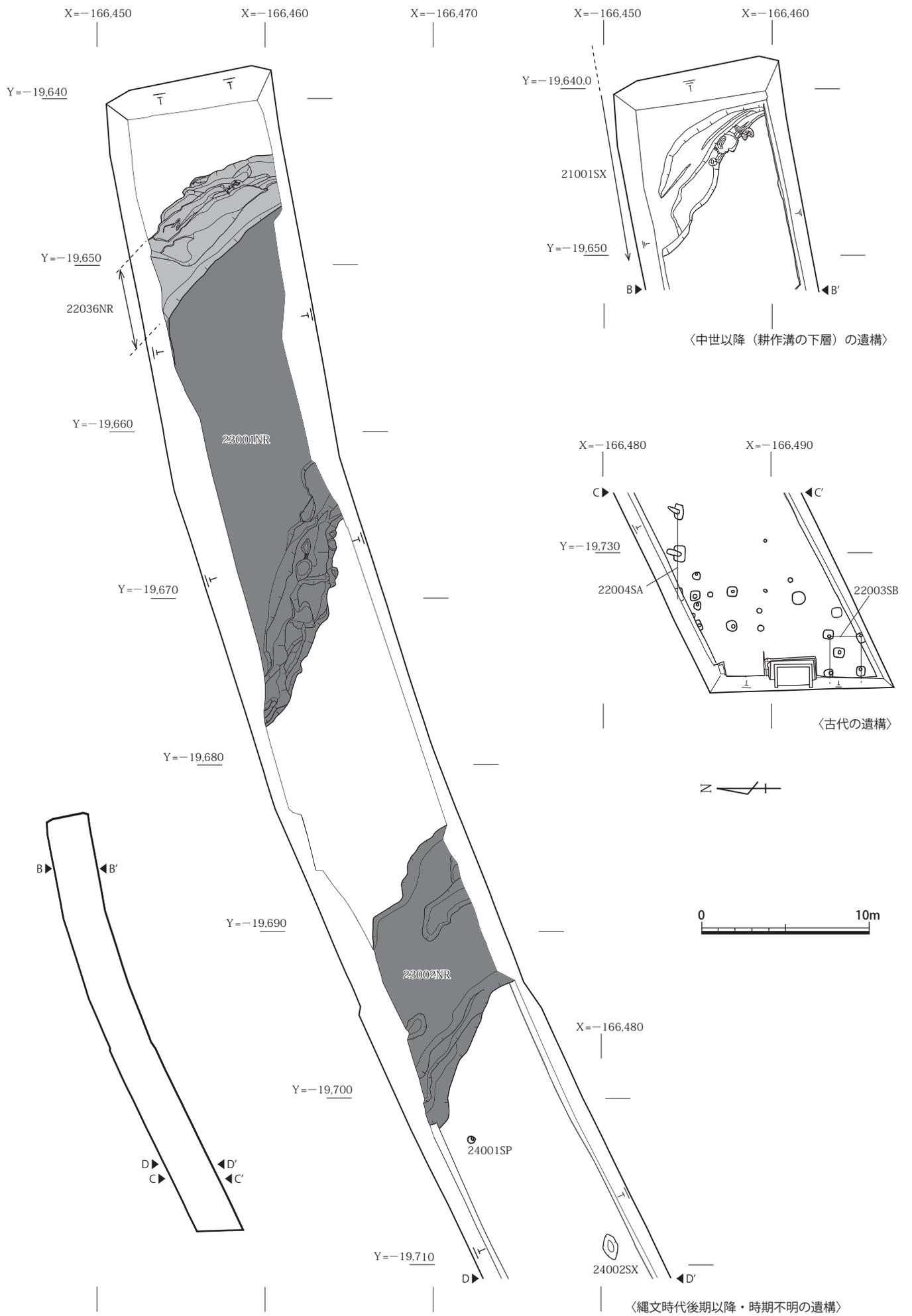


図 16 2区 下層遺構平面図 (S=1/300)

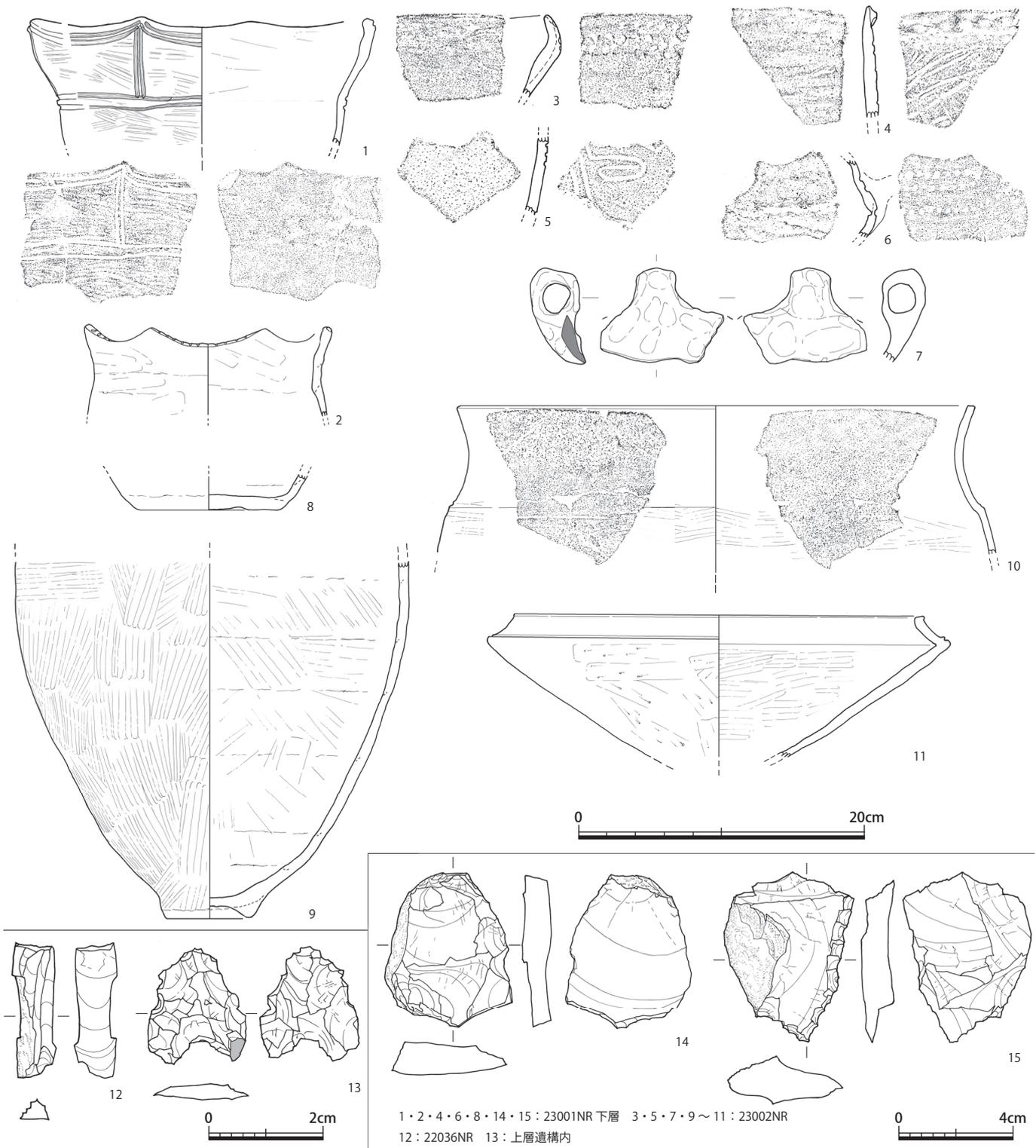


図 17 出土遺物 (1~11: S=1/4, 12・13: S=1/1, 14・15: S=1/2)

### 3. まとめ

今回の調査では、中世以降・古代の遺構と、縄文時代後期以降の河道、時期不明の遺構を確認した。

1区・2区西端で確認した古代の建物・ピットからは、詳細な時期を特定できる遺物は出土していない。近隣には藤原京期の遺構が存在するため、今回確認した建物やピットも近い時期の遺構であると想定する。

2区で確認した縄文時代後期以降の河道は、少なくとも古代のうちに埋没したと判断できる。河道からは縄文時代後～晩期・弥生時代前期の遺物が出土した。調査区内には縄文時代後

～晩期・弥生時代前期の遺構は存在しなかったが、調査地の近隣に当該期の遺跡が存在する可能性がある。

なお、西八坊坊間路は存在しなかった。西八坊坊間路の想定線は2区中央付近であり、前述のとおり破壊されている地点であるため、遺構が消失した可能性がある。

(杉山真由美)

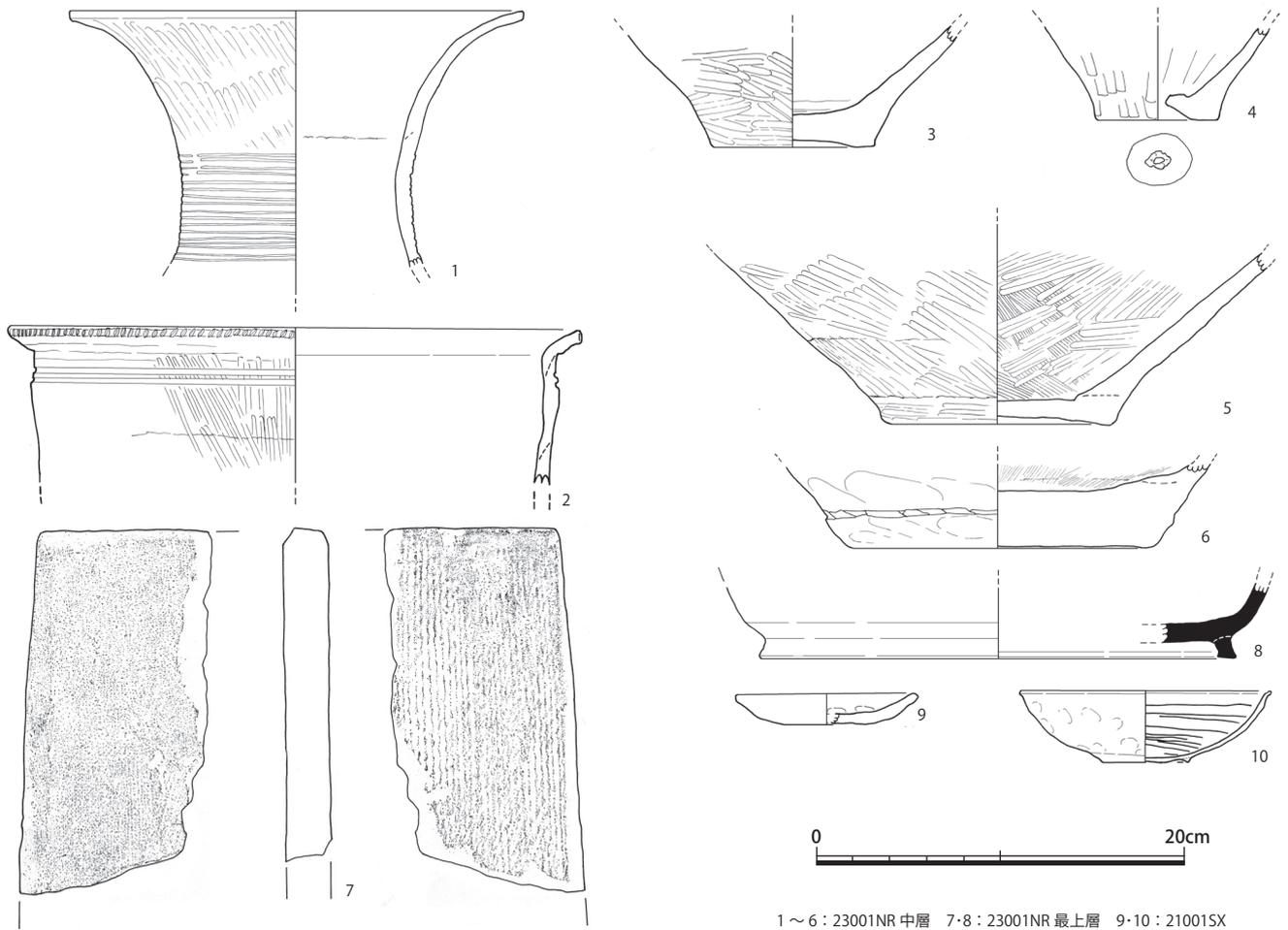


図 18 出土遺物 (S=1/4)



写真 30 1区下層遺構完掘状況 - 東から -



写真 31 2区西端下層遺構完掘状況 - 西から -



写真 32 2区東端下層遺構完掘状況 - 東から -



写真 33 23001NR 遺物・流木出土状況 - 北西から -



写真 34 23001NR 土層断面 - 南東から -



写真 35 23002NR 土層断面 - 南東から -

## 藤原京左京北一条三・四坊

調査地 石原田町 139 - 2 他 2 筆

調査期間 平成 30 年 2 月 5 日～平成 30 年 3 月 15 日

調査面積 150 ㎡

調査原因 市道石原田町内線築造

### 1. はじめに

調査地は榎原市の東部、石原田町に所在する。近鉄大阪線耳成駅から南東約 100 m の地点に位置する現況水田地である。近年、調査地周辺は宅地化が進行しており、宅地の間に農地がわずかに残るのみとなりつつある。調査地から南に約 100 m の地点には、米川が東から西に向かって流れている。

調査地は藤原京の左京北一条三坊東南坪および左京北一条四坊西南坪にまたがり、調査区西半付近に東三坊大路が通る位置にあたる。

### 2. 調査の概要

調査は遺構面までの掘削を重機で行い、以後の遺構調査は人力で行っている。排土置場の都合上、調査区を東・西に二分割し、期間の前半に調査区東半部の調査を、後半に西半部の調査を行っている。

基本層序は以下の通りである。調査区全体で概ね共通する。

I 層：現代耕作土（上面の標高約 65.8 ～ 65.9 m）

II 層：浅黄色粘質土（床土。厚さ約 0.2 m）

III 層：灰黄色微砂質土（中世以降の旧耕作層。厚さ約 0.2 ～ 0.3 m。瓦器片を含む）

IV 層：淡黄灰色微砂（古代以降の氾濫層。調査区西半にのみ存在。厚さ最大約 0.15 m）

V 層：明褐灰色粘質土（遺構ベース層。上面が遺構面。弥生時代遺物包含層。上面の標高約 65.30 ～ 65.35 m）

VI 層：灰白色シルト質粘土～微砂、黄橙色砂質土（厚さ約 0.6 m 以上。遺物を含まない）

V 層上面が遺構面である。検出した遺構は、上層遺構と下層遺構に分けられる。上層遺構が古代以降の耕作溝群で、下層遺構が藤原京期の遺構である。遺構面の標高は調査区全体で概ね水平だが、調査区東端付近がわずかに低い。

上層遺構は、いわゆる素掘り耕作溝群である。東西方向の溝と南北方向の溝があり、南北方向の溝のほうが古い。耕作溝の規模は幅約 0.2 ～ 0.4 m、深さ最大約 0.15 m を測る。上層遺構からの出土遺物には土師器・須恵器があるが、時期の明確な資料は下層に由来すると考えられる藤原京期のものが中心である。その他では、11 ～ 12 世紀頃のほぼ完形の土師皿 2 点が出土している。なお、東西方向の溝のうち新しい一群の一部は

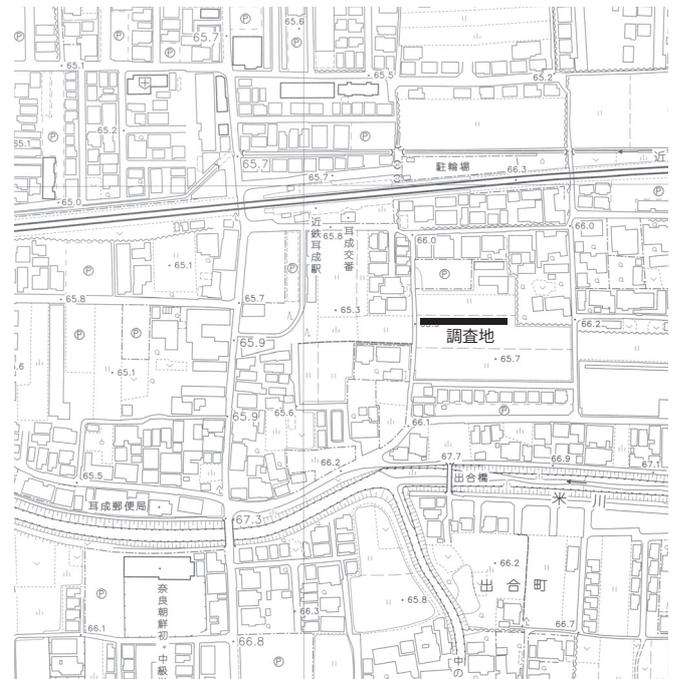


図19 発掘調査地位置図 (S=1/5,000)

IV層上面から掘り込まれている。IV層は調査地一帯が耕作地として利用されている時期に堆積した氾濫層であり、氾濫後も耕作地としての利用を続けるべく復旧を行ったようである。

下層遺構は藤原京期と考えられる時期の遺構である。溝 2 条とピット 1 基がある。013SD と 014SD は調査区西半に位置する南北方向の溝で、ともに藤原京期の土師器・須恵器が出土している。013SD は幅約 1.4 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は明褐灰色微砂混じり粘質土である。014SD は幅約 0.8 m、深さ約 0.1 m を測る。埋土は褐灰色微砂土である。013SD と 014SD は、遺構の構造や検出位置、出土遺物から、藤原京東三坊大路の東・西側溝であると考えられる。この場合、東三坊大路の芯々間距離は約 8.6 m、路面幅約 7.5 m を測ることとなる。001SP は調査区東端で検出した一辺約 0.5 m、深さ約 0.3 m を測る隅丸方形のピットである。確認できた藤原京期の遺構は数が限られるが、上層遺構や III・IV 層中からは藤原京期の土器が一定量出土しており、周辺に同時期の遺構が他にも存在する可能性は十分に考えられる。

上層遺構および下層遺構の遺構ベース層である V 層からは、弥生土器の細片が出土している。出土量は調査区東側にやや多い傾向にある。弥生時代以前の遺構の存在を想定し、VI 層上面においても遺構の確認作業を実施したが、遺構は存在しなかった。

### 3. まとめ

調査の結果、古代以降の耕作溝群と藤原京期の遺構の存在を確認している。注目すべき成果として、藤原京の東三坊大路の検出が挙げられる。東三坊大路は過去の検出例が非常に限られ、その数少ない検出例として榎原市教育委員会が左京北四条三・四坊で実施した発掘調査(榎教委 2003-6 次調査)がある。

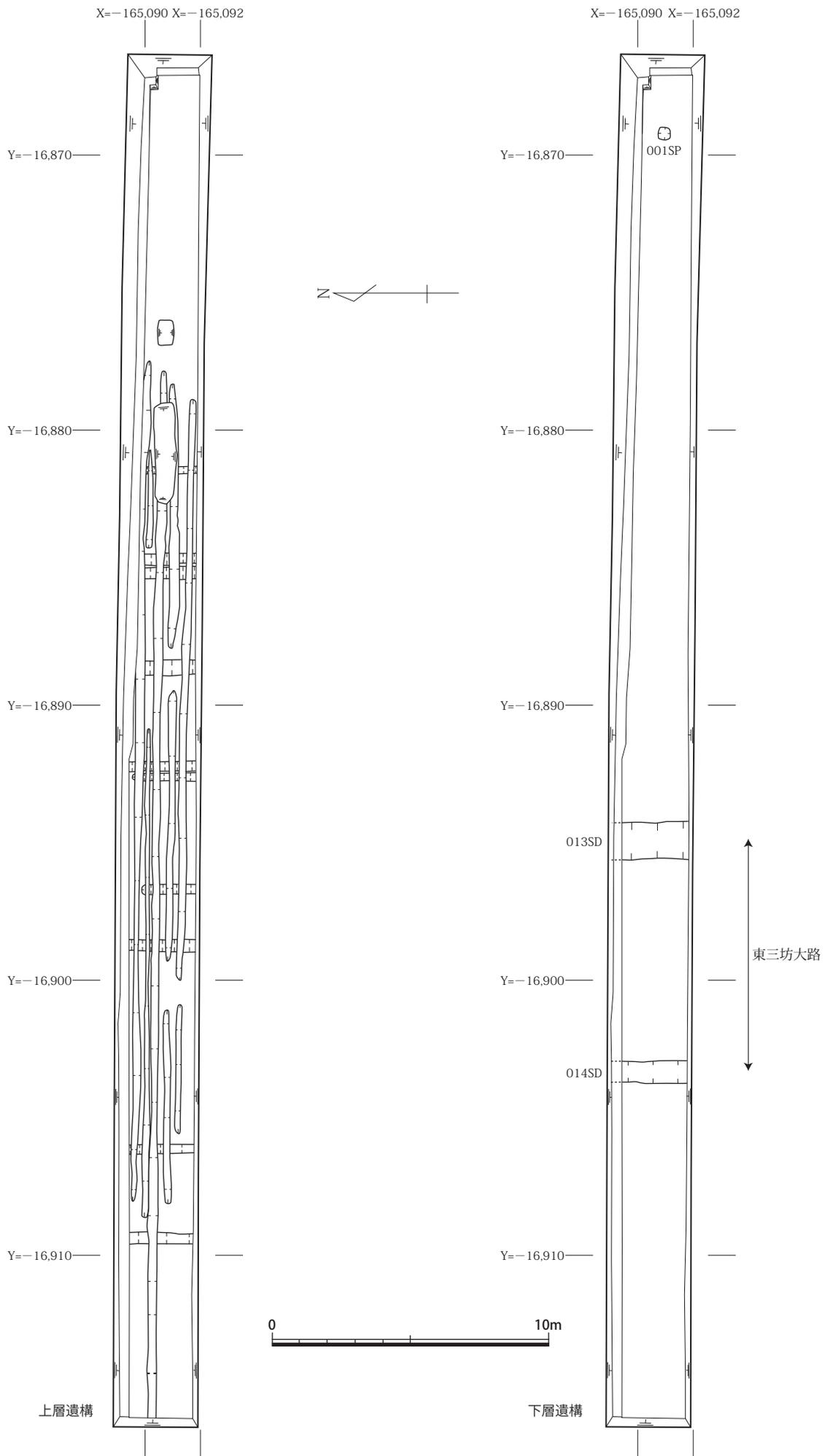


图 20 遺構平面図 (S=1/200)



写真 36 調査区東半部遺構検出状況 - 東から -



写真 37 調査区東半部遺構完掘状況 - 東から -



写真 38 調査区西半部下層遺構検出状況 - 西から -

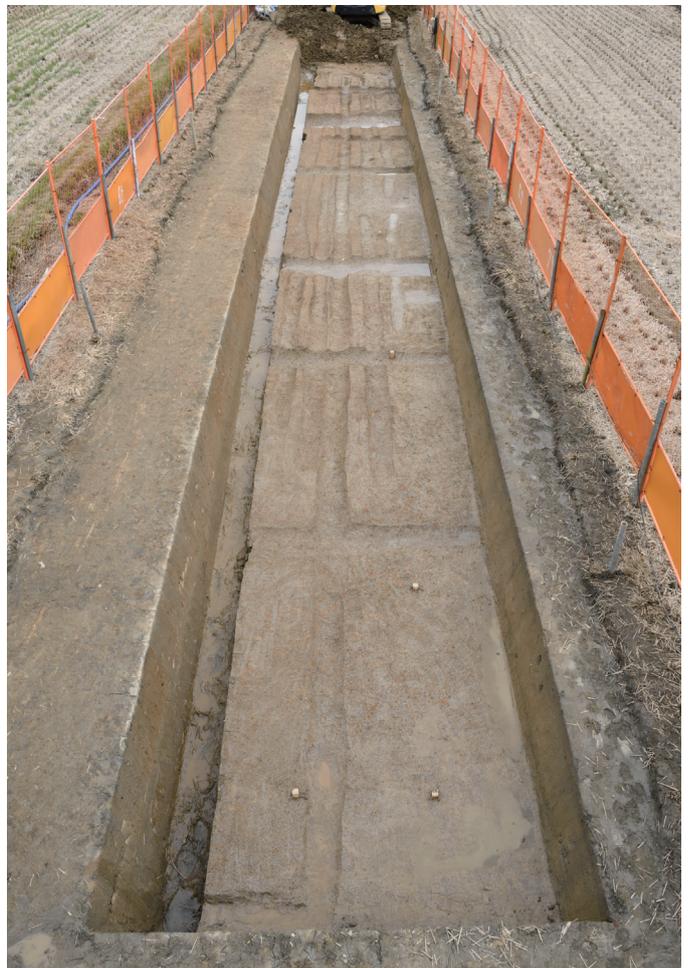


写真 39 調査区西半部下層遺構完掘状況 - 西から -

同調査では東三坊大路の東・西側溝が検出されており、この東三坊大路の芯々間距離は約9.0 m、路面幅約7.5 mを測る。また、東側溝が西側溝よりも深いことが報告されている。これらの規模や構造は、今回の調査で確認している東三坊大路と概ね共通する。

調査区の範囲に限られることもあり、確認できた東三坊大路以外の藤原京期の遺構はピット1基のみである。宅地利用の在り方等の詳細については、周辺での調査例の増加を待ちたい。

(石坂泰士)



写真40 調査区東半部 耕作溝 遺物出土状況 - 南東から -



写真41 001SP 検出状況 - 南から -



写真42 東三坊大路完掘状況 - 東から -



写真43 014SD 検出状況 - 北から -



写真44 013SD 検出状況 - 北から -



写真45 調査区北壁 014SD 土層断面 - 南から -



写真46 調査区北壁 013SD 土層断面 - 南から -



## Ⅱ．出土遺物保存処理事業

発掘調査によって出土した遺物の中には、その材質によって外気に触れることで大きく変形し、劣化・崩壊するものがある。それを防ぎ、出土した状態を保持するため、各材質に応じた化学的処理を行っている。

木を材料として製作された遺物は長時間土の中に埋まっている間に木質内部の組織が水に置き換わってしまい、スポンジのような状態となっている。そのため、出土後乾燥が進むと変色・変形し元の形を保つことが出来なくなることから保存処理を行い、脆弱になった遺物を強化し形状の安定を図った。保存処理に使用する薬剤・溶剤については、将来的な再処理を視野に入れた可逆性のあるものを使用している。

平成 29 年度は国庫補助事業により、市内遺跡発掘調査出土木製遺物保存処理委託業務で、木製遺物（合計 15 点）の保存処理を行った。保存処理した木製遺物は一覧の通りである。

今年度の保存処理委託業務では、高級アルコール含浸処理法による保存処理を行った。業務では、保存処理前後の写真撮影により遺物の状態を確認すると共に、遺物の寸法、重量の記録をとった。

保存処理木製遺物一覧

遺 跡 名	遺物名	点数
榎教委1992 - 17次	藤原京右京五条四坊 (2次)	容器 1
榎教委1991 - 19次	藤原京右京五条四坊	加工木 1
榎教委1991 - 19次	藤原京右京五条四坊	琴柱 1
榎教委1991 - 19次	藤原京右京五条四坊	刀形木製品 1
榎教委1991 - 19次	藤原京右京五条四坊	杭形木製品 1
榎教委2003 - 2次	藤原京左京一・二条四坊	加工木 10

(平岩欣太)

## Ⅲ．文化財諸申請処理業務

平成 29 年度 文化財諸申請事務処理件数一覧表

	踏 査 願	の 発 掘 出 調 査	埋蔵文化財発掘届出					埋蔵文化財発掘通知					現状変更		取 下 書
			通知内容					通知内容					許可 申請	完了 届	
			発掘 調査	工事 立会	慎重 工事	工事 先行	計	発掘 調査	工事 立会	慎重 工事	工事 先行	計			
道路	1						4	3	2		9		1		
住宅			7	19	62	4	92								
個人住宅			3	43	101	1	148								
店舗		1	4	5	5		14								
住宅兼工場等															
その他建物			4	4	6		14		1	1		2			
宅地造成		2	14	3	3		20		1	1		2		1	
その他開発				3	3	2	8			2		2	7	5	
ガス等					1		1		6	1		7	1		
農業関係															
河川									2	5		7			
学校															
工場															
公園造成									1			1			
観光開発															
学術												2	1		
遺跡整備															
その他		1		2	13	1	16	1	28	18		47	20	7	
計	1	4	32	79	194	8	313	5	42	30		77	30	14	1
総件数															440

## IV. 普及啓発事業

### 1. 講師派遣

市内外の要請に応じて、講師の派遣を行っている。

#### ○7月27日(木)

「橿原市の歴史」講座 講師として

橿原市立橿原中学校 2F 図書室 竹田正則

#### ○8月5日(土)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

速報展「大和を掘る 35」土曜講座 講師として

奈良県立橿原考古学研究所 講堂 石坂泰士

#### ○10月13日(金)

奈良県立大学ユーラシア研究フォーラム 2017 講師として

大峯山龍泉寺 竹田正則

#### ○11月11日(土)

飛鳥認定通訳ガイド育成研修

「飛鳥地方の地理歴史」講師として

橿原市商工経済会館 石坂泰士

#### ○2月24日(土)

奈良大学 OB が語る 第1回考古座談会 in 飛鳥

「藤原京と周辺部の調査」講師として

飛鳥の宿 祝戸荘 平岩欣太

#### ○3月28日(水)

多地域学級研修会「橿原市の歴史」

多地区公民館 平岩欣太

### 2. 公開イベント

#### ○菖蒲池古墳 特別公開

橿原考古学研究所による小山田古墳の現地説明会にあわせて菖蒲池古墳の特別公開を行った。

平成30年8月26日(土)

来場者数 576名

### 3. 書籍刊行

『新堂遺跡Ⅱ—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—』橿原市埋蔵文化財調査報告 第14冊

平成30年3月9日 橿原市教育委員会編

### 4. 説明板等の設置・管理

市内に所在する文化財についての普及、啓発を図る目的で説明板を設置している。

なお、平成29年度は菖蒲池古墳説明板1基の修繕を行った。

## V. 史跡整備事業

### 史跡地の公有化

史跡公園整備に向け、史跡指定地の公有化を図っている。

#### ○丸山古墳

所在地：橿原市五条野町・大軽町

概要：越智岡丘陵の東、高取川をはさんで東に続く台地の西端に、前方部を北にして築かれた6世紀後半の大型の前方後円墳である。

墳丘全長約310m、後円部径約150m、前方部幅約210mを測り、県下最大の前方後円墳古墳である。石室の全長は26m以上あり、玄室内に2個の家形石棺があることが判明している。

#### (1) 公有化基本方針

現在、古墳の前方部の一部は国道169号線によって分断された状態にあり、完全な前方後円墳としての形は整えていないが、墳丘の大部分と東側の周濠や周庭帯は部分的にその姿をとどめている。可能な限り古墳本来の姿を保ちつつ、市民生活の中に活用し、保存と活用を調和させながら将来にわたる本市の象徴の一つとしたい。

#### (2) 公有地化計画

史跡の現況を考慮し3地区に分類し、地区ごとの計画を定める。なお、今後も調査研究や地域の社会環境の変化に応じて地域区分に修正を加えていくものとする。

#### 【公有化事業】

平成30年度へ繰越

## VI. 指定文化財維持管理事業

### 1. 草刈

史跡地およびその周辺への雑草の影響を軽減し、また見学者が快適に見学できるように配慮し、年1回以上の草刈を実施している。

#### 【作業箇所】

国指定特別史跡本薬師寺跡、国指定史跡新沢千塚古墳群、国指定史跡丸山古墳、国指定史跡菖蒲池古墳、国指定史跡植山古墳

### 2. 修理事業

指定文化財修理事業経費の部分補助を行っている。

#### 【解体修理】

国指定重要文化財建造物称念寺本堂(今井町)、県指定彫刻木造大日如来坐像(十市町)

#### 【部分修理】

国指定重要文化財建造物今西家住宅(今井町)、国指定重要

文化財建造物高木家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物豊田家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物音村家住宅（今井町）、県指定建造物山尾家住宅（今井町）、市指定建造物旧常福寺観音堂付棟札2枚（今井町）

### 3. 管理事業

指定文化財管理事業経費の部分補助を行っている。

#### 【事業実施箇所】

○国指定重要文化財建造物榎原神宮本殿（久米町）、国指定重要文化財建造物人麿神社本殿（地黄町）、国指定重要文化財建造物瑞花院本堂（飯高町）、国指定重要文化財建造物今西家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物豊田家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物音村家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物河合家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物高木家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物中橋家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物森村家住宅（新賀町）

○県指定建造物旧上田家住宅（今井町）、県指定彫刻木造大日如来坐像（十市町）、県指定彫刻木造聖徳太子（大久保町）

○市指定建造物旧常福寺観音堂付棟札2枚（今井町）、市指定建造物旧常福寺表門（今井町）

また、毎年文化財防火デー前後に合わせて行われる消防署による消防設備の点検を文化財所有者立会いの下、合同で行っている。

## Ⅶ. だんじり保存事業

市内に現存する優れただんじりを普及・啓発し後世に伝承することを目的とし、だんじりに関する調査、研究並びにだんじりの維持管理事業を行っている。現在、榎原市には保存会により江戸時代末期から明治時代にかけて製作されただんじりが10台（十市町7台・今井町2台・小綱町1台）が保存されている。

#### 【だんじり維持管理】

提灯修理等

---

---

平成 29 (2017) 年度 橿原市文化財調査年報

発行日 平成 31 (2019) 年 2 月 28 日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会  
〒634 - 0826 奈良県橿原市川西町858 - 1  
TEL 0744 - 22 - 4001 (代)

印刷 株式会社 アイプリコム  
奈良県橿原市今井町3 - 2 - 5  
TEL 0744 - 22 - 6155

---

---